

柏原市内遺跡群発掘調査概報

平成20（2008）年度

平成21（2009）年9月

柏原市教育委員会



調査区全景（延石と先行遺構 東から）

はしがき

本書には、平成20年度に実施した市内の文化財に係わる調査のうち、埋蔵文化財の発掘調査について、その概要を収録しています。

埋蔵文化財の発掘調査については、文化財保護法にもとづき、遺跡や史跡の中で行われる建築・土木工事に先立って実施したものと、将来に向けた遺跡の保存を目的として、遺跡の範囲や遺存状況を確認するために対応したるものとがあり、後者については河内国分寺跡の発掘調査が該当します。

この河内国分寺跡の発掘調査では、塔跡（七重塔）から西におよそ100m離れた場所で、これまで中門と回廊の基壇と推定されていた遺構を再調査しましたところ、国分寺としては類例のない幅の広い階段をもった金堂の可能性が浮上し、新聞紙上でも大きく取り上げられました。さらに、調査成果を実際に見ていただくために現地説明会も実施し、大変に交通が不便な場所にもかかわらず、300人近い方々に足をお運びいたただくことができました。

ところで、その現地説明会では、男女の別、お住まいの場所、年齢などについて簡単なアンケートを実施させていただきましたが、それによると、見学者数の年代別ベスト3は①60才代②70才代③50才代という結果になりました。ご高齢の方々の古代史に対する旺盛な探究心に敬意を表するとともに、地域の文化財についての調査成果を多くの方々に見ていただけた重要性を、また、生涯学習について積極的に取り組む必要性を、あらためて痛感した次第です。

もちろん、埋蔵文化財に限らず、こうした地域における文化財の調査や調査成果の公開は、多くの方々のご理解とご協力がなければ実現できるものではありません。今後とも、ご支援のほど宜しくお願ひ申し上げます。

平成21年9月30日

柏原市教育委員会

例 言

- 1、本書は、柏原市教育委員会が平成20年度に計画・実施した柏原市内に所在する遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2、調査は、柏原市教育委員会社会教育課主幹兼文化財係長 北野 重・主査 桑野一幸・同 石田成年・係員 山根 航（嘱託）を担当者として実施し、本書には平成20年4月1日から平成21年3月31日の間に着手した発掘調査の概要を掲載した。
- 3、この他、本書には平成20年度（平成20年4月1日から平成21年3月31日）に実施した発掘調査の一覧を掲載した。
- 4、調査・整理の参加者は次のとおりである。（順不同、敬称略）

分才隆司 阪口文子 楠原美智子 乃一敏江 橋口紀子
市民歴史クラブ（柏原市立歴史資料館所属）

- 5、本書において使用した方位は、基本的には座標北であるが、第6章の河内国分寺跡の報告では磁北を示している。また、標高の記述・記載があるものについてはT.P.（東京湾標準潮位）+値である。
 - 6、河内国分寺跡の範囲確認調査および現地説明会では、以下の諸氏・諸機関からご協力・ご教示を頂きました。記して謝意を申し上げます。（順不同、敬称略）
- 旗野武雄 中谷泰久 森岡 修 水野正好 森 郁夫 大脇 潔
上原真人 奥田 尚 烏田敏男 甲斐弓子 柏原東小学校
- 7、遺構・遺物の写真は担当者が撮影した。
- 8、本書の執筆・編集は桑野、山根が担当した。

目 次

卷頭図版

はしがき

例言

目次

平成20（2008）年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

柏原市と掲載遺跡の位置

（高井田横穴群と玉手山遺跡の調査地の位置）

（原山遺跡と田辺遺跡の調査地の位置）

第1章 太平寺廃寺-----	1
太平寺廃寺 2008-1次調査-----	2
第2章 安堂遺跡-----	3
安堂遺跡 2008-1次調査-----	4
第3章 河内国分寺跡-----	6
河内国分寺跡 2008-1次調査-----	7

写真図版

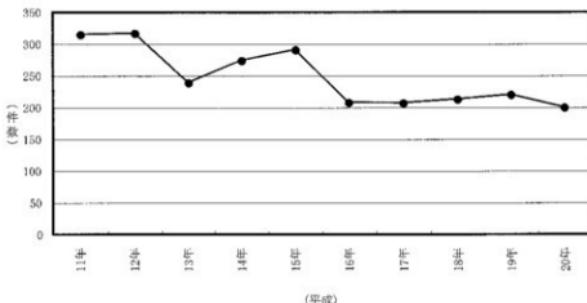
報告書抄録

平成20(2008)年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

遺跡名 対象地 (柏原市…)	調査次数 対象面積 m ²	調査面積 m ² 用 途	調査日 (日・月)	文書番号 担当者	備 考
太平寺廁寺 2008-1 太平寺 2-360-2/362-2	4.00 697.43	個人 個人住宅	H20.6.9	201-1 桑野	本書 1 頁
田辺遺跡 2008-1 田辺 1-106-1 の一部	28.80 789.19	セイワプランニング㈱ 宅地造成	H20.6.26	201-2 桑野	遺物・遺構なし 整地土・水田・黄灰色粘土
河内国分寺跡 2008-1 国分東条町 3847/3848-1	89.00 662.70	柏原市教育委員会 範囲確認	H20.10.2 H21.2.16	201-10 桑野・山根	本書 6 頁
玉手山遺跡 2008-1 円明町 144	3.00 90.00	関西テレビ放送㈱ アンテナ用鉄塔	H20.12.15	201-11 桑野	遺物・遺構なし
田辺遺跡 2008-2 田辺 2-1300-1 /他 4 箕	9.00 1,848.61	柳竹弘鉄建 宅地造成	H20.12.19	201-6 石田	遺物・遺構なし 旧耕作土・黄灰色粘土
高井田塹穴群 2008-1 高井田 773/776-2 の各一部	2.25 1,333.22	個人 個人住宅	H20.12.24	201-12 桑野	遺物・遺構なし 一部で凝灰岩露出
安堂遺跡 2008-1 安堂町 910/911/912 /他 4 箕	12.00 1,897.07	佛ビーバー・ハウス 宅地造成	H20.12.19 H21.3.12	201-7 桑野	本書 3 頁
原山遺跡 2008-1 旭ヶ丘 3-4801-1 /他 56 箕、他	2.00 39,304.48	学校法人玉手山学園 校舎増築	H21.3.6	201-9 石田	遺物・遺構なし
高井田塹穴群 2008-2 高井田 645-1 /他 13 箕	4.90 35,594.98	柏原市教育委員会 史跡整備	H21.3.11 H21.3.30	201-13 北野・山根	遺物・遺構なし

平成20年度において文化財保護法第93条第1項・第94条第1項にもとづく届出・通知がなされたものは200件、その中で発掘調査の指示は11件、立会調査の指示は20件、慎重工事の指示は189件であった。また、遺跡外の確認調査は9件であった。なお同法第99条第1項にもとづき着手した発掘調査は2件であった。

届出・通知件数の推移



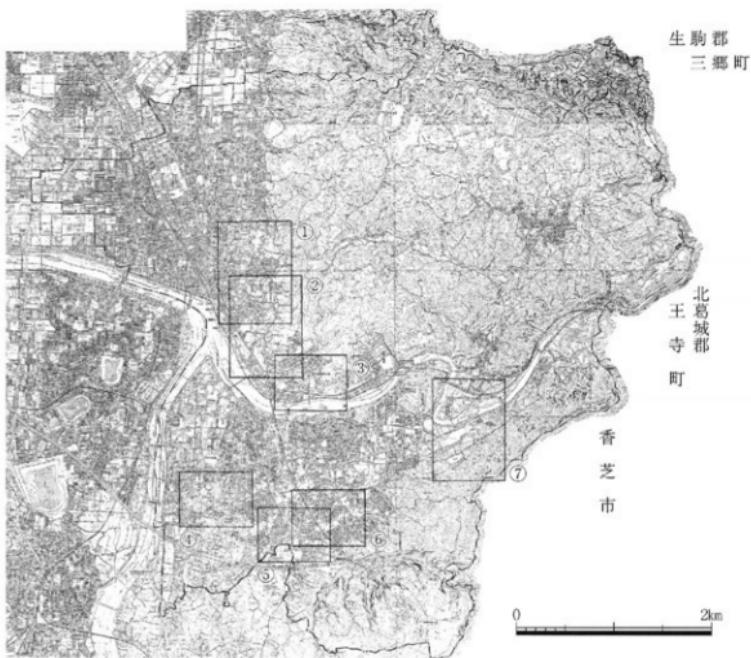
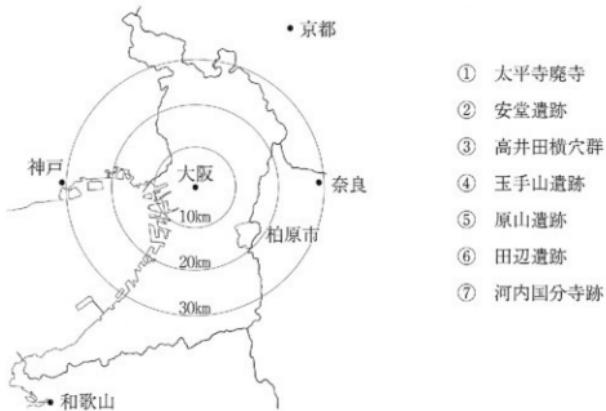


図1 柏原市と掲載遺跡の位置



図2 高井田横穴群（上）、玉手山遺跡（下）調査地位置図

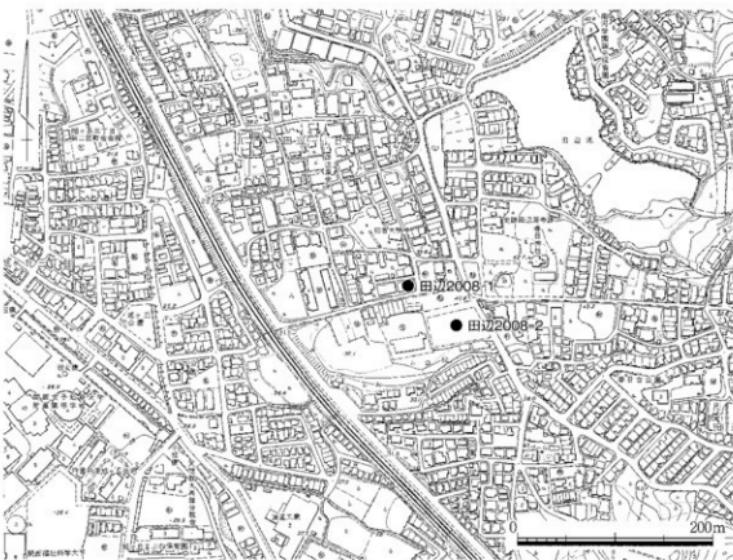
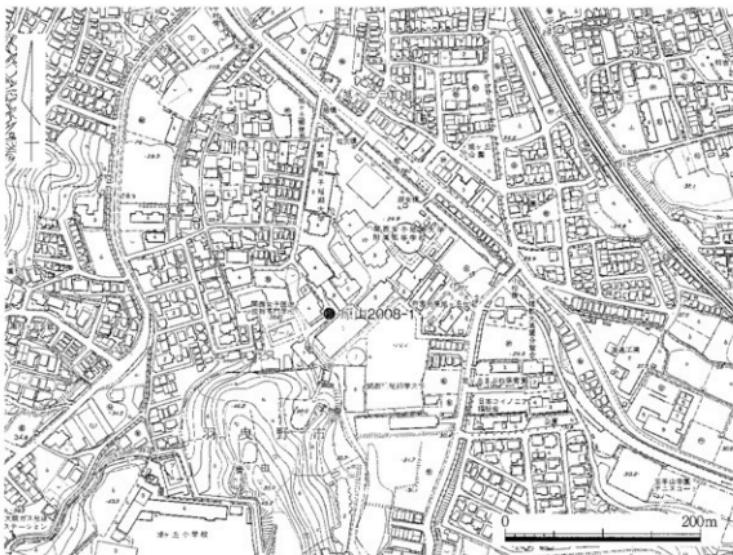


図3 原山遺跡（上）、田辺遺跡（下）調査地位置図

第1章 太平寺廃寺



図4 調査地位置図（図1の①）

太平寺廃寺 2008-1次調査

- ・調査対象地 太平寺 2-360-2/362-2
- ・調査期間 2008年6月9日
- ・調査面積 4.00m²
- ・調査担当者 桑野一幸

太平寺廃寺は、古代の智識寺（『続日本紀』など）や中世の太平寺（『経覺私要鈔』）に相当する寺院遺跡である。遺跡の範囲として約200m四方が設定されており、調査地はその南半部のほぼ中央に位置し、智識寺の推定金堂の南西側から西側にかけての地区にあたる。

調査では、2m四方の調査区を設定し、人力で掘削した。地表から順に①黒灰色土層（現代の耕作土）、②茶灰色粗砂層（貝ボタンに関わる貝殻粉を含む）、③茶灰色シルト層（近・現代の陶磁器を含む）、④青灰色粘土層（水田の耕作土）、⑤灰色砂質シルト層が堆積していた。地表面の標高は17.6m程であり、④層は地表から約50cm、⑤層は地表から約80cmの深さであった。水田→貝ボタン工場→畑という変遷を示し、遺物・遺構は検出されなかった。

太平寺廃寺では、2007-1次調査で東塔基壇の残存部の標高が17.7～17.9m、雨落溝の標高が17.3mであることが分かっている。この数値から推測すると、調査地においては、仮に智識寺に関連する遺構があったとしても既に削平されている可能性が高い。

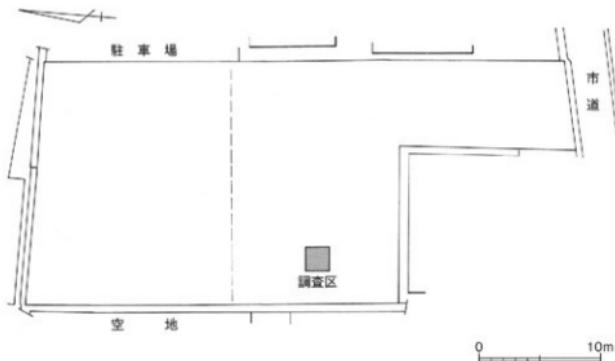


図5 調査区位置図

第2章 安堂遺跡



図6 調査地位置図（図1の②）

安堂遺跡 2008-1次調査

- ・調査対象地 安堂町910/911/912/913-1/913-2/913-3/976-1
- ・調査期間 2008年12月19日～2009年3月12日
- ・調査面積 120.00m²
- ・調査担当者 桑野一幸

調査地は安堂遺跡の北東部に位置し、『続日本紀』に「河内六寺」として記載された太平寺廃寺（智識寺）と安堂廃寺（家原寺）のほぼ中間に当たる。

調査地周辺は、かつては生駒山地の西麓斜面を利用して階段状に造成された葡萄畠が広がっていたが、現在は、そうした往時の景観はほとんど失われている。調査地の東側も既に住宅地として開発されているが、西側では、今でもわずかに葡萄が栽培されている。

調査地は南北約95m×東西約30mの大きさである。標高24.5～27.5mの西に下降する急斜面であり、西側の葡萄畠との間には1m以上の段差がある。既往の調査から判断すると、かなり大きな谷地形を埋め立てて階段状の畠地を造成した場所と考えられる。

調査区は、調査地の西辺に沿って南から約40mまでの範囲に設定した（図7）。

調査区における地層の堆積状況は、地表から約1.50mの深さ（西側の畠地の地表面とほぼ同じ高さ）までは近・現代の盛土層、以下は谷の埋没土層であり、黒灰色粗砂質粘土・黒灰色砂礫土・茶灰色粗砂・黒灰色粗砂・灰緑色粗砂などが交互にあるかはブロック状に堆積していた。また、近・現代の盛土層直下の黒灰色粗砂質粘土層には、6～7世紀の土師器・須恵器を中心埴輪や平瓦が含まれていた。この地層については、地形・土質や遺物の混在状況から判断して、谷地形に自然に流入した1次的な遺物包含層ではなく、整地等に伴う2次的な遺物包含層と判断された。なお、調査区の南端周辺では谷の埋没土層は薄く、比較的浅い位置で地山が検出されたことから、調査区あるいは調査地全体としてみれば、より北側に谷の中心部が存在するものと考えられた。

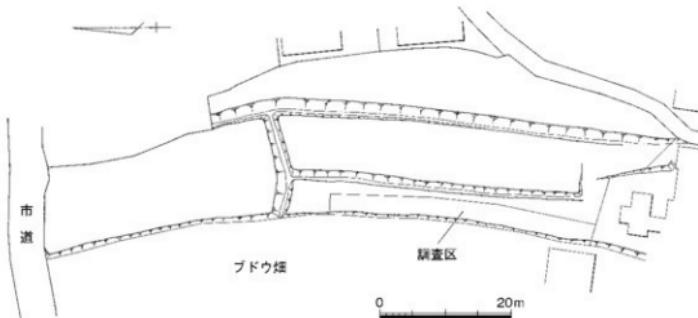


図7 調査区位置図

出土した遺物には、土師器として杯・高杯・椀・皿・鉢・壺・小型壺・壺・鍋・鉢釜・竈など、須恵器として杯（身・蓋）・無蓋高杯・長脚一段透かし無蓋高杯・壺・ハソウ・平瓶・器台など、円筒埴輪・丸瓦・平瓦（綾杉・有軸綾杉・繩）、砥石がある。小片が多く、図示できるものは少ないが、その内いくつかを以下に掲げておく。

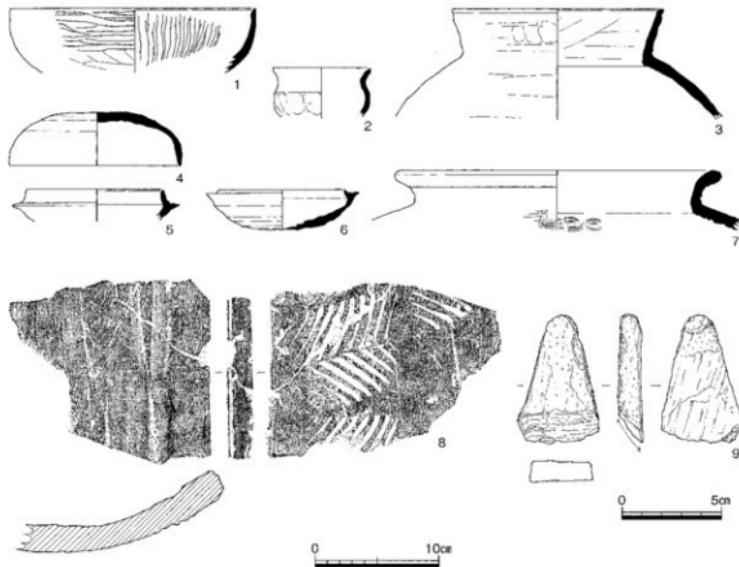


図8 出土遺物

第3章 河内国分寺跡

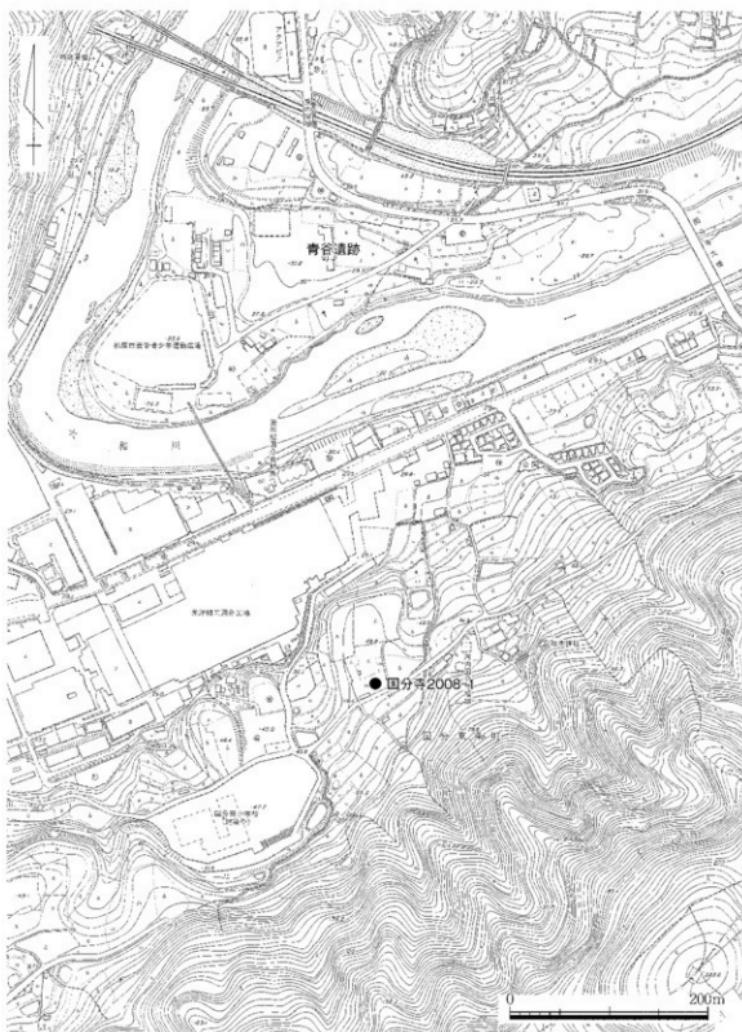


図9 調査地位置図（図1の⑦）

河内国分寺跡 2008-1次調査

- ・調査対象地 国分東条町3847/3848-1
- ・調査期間 2008年10月2日～2009年2月16日
- ・調査面積 89.00m²
- ・調査担当者 桑野一幸、山根 航

はじめに

柏原市教育委員会では平成18年度から河内国分寺における確認調査を実施してきた。過去2ヵ年は塔の北側地域で調査を実施したが(1～7区)、寺院に関連する遺構は確認されなかった。3年目にあたる平成20年度は、塔から西へ100m程離れた比較的広い丘陵の南辺部で発掘調査を実施した。

その結果、幅の広い石の階段をもつ凝灰岩壇上積基壇跡が検出され、この遺構が河内国分寺の金堂ではないかと推測されるようになるとともに、この基壇構築によって破壊された先行遺構の存在も明らかになるなど、極めて重要な調査成果を得ることができた。

調査地の地形および既往の調査（図9）

調査地は大阪と奈良の府県境に連なる明神山地の北斜面にあたり、大和川に降る尾根末端部の丘陵上に位置している。標高は約49～50mを計測するが、大和川水面の標高は約22m、大和川対岸に位置し竹原井頓宮と推定されている青谷遺跡の標高は約30mであり、調査地が位置する丘陵とはかなりの比高差が存在する。また、この丘陵を中心に据えると、小谷を挟んで東側の丘陵には塔跡があり（註1）、大きな谷で隔てられた西側の丘陵には規模や性格は判らないものの比較的大きな掘立柱建物が確認されている（註2）。さらに、南側は山地に向かって上る緩～急な斜面地である。

調査地では、昭和45年に行われた大阪府による塔跡の発掘調査の際に、屈折して並ぶ凝灰岩延石が既に確認されており、その報文以来、当該遺構については「中門」という評価がなされ、丘陵の中央部から北側において金堂や講堂が建てられていたと考えられてきた（註3）。今回の発掘調査は、この凝灰岩延石の規模や性格を把握するために実施した。

調査区の設定（図10）

調査区は対象地の北側に設定した（8区）。まず凝灰岩延石の屈折部を探るために南北方向のトレンチを設定し、屈折部が検出された時点で、調査対象地の北辺の際まで、北側及び西側に調査区を拡張した。東側については、大阪府の調査で延石屈折部から土地の境界まで約5m、延石にして6石分連なっていることが確認されているため（註4）、今回は対象としなかった。また南側については、延石の設置（河内国分寺の推定金堂に伴う基壇の構築）によって破壊された先行遺構（基壇状遺構）の存在が明らかになったため、その規模を探ることができる範囲で拡張した。

なお地区割りライン（S-N、E-W）は復元塔基壇心礎からの方向と距離を示している。

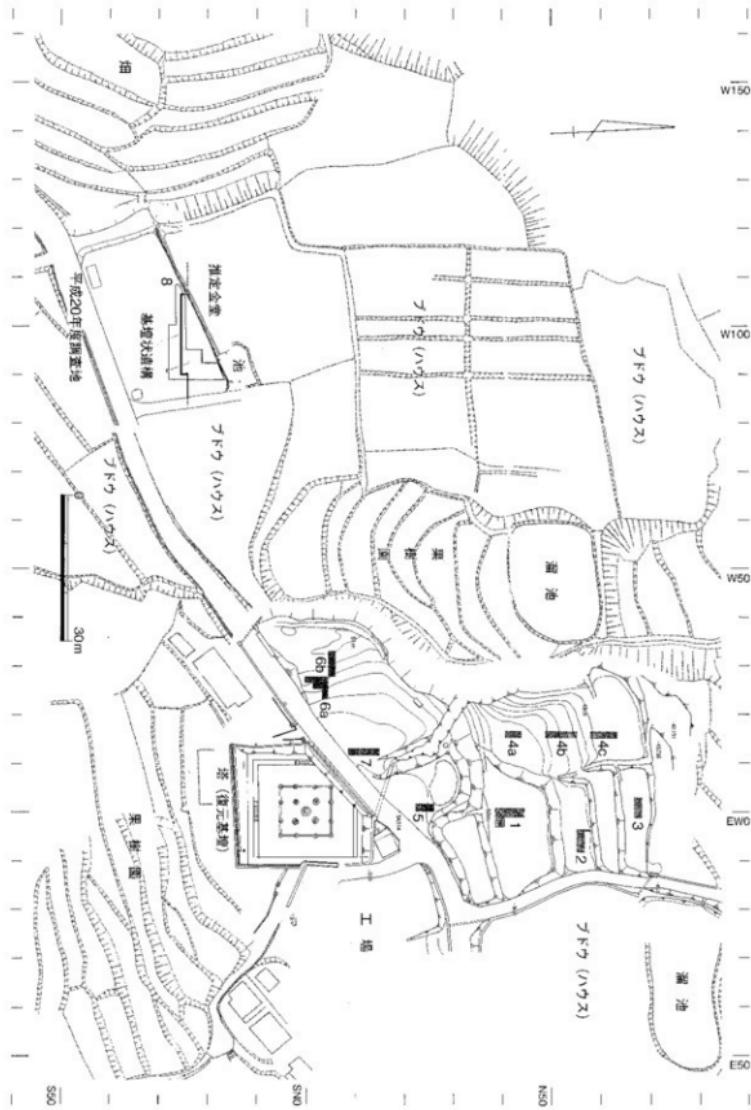


図10 調査区位置略測図（ゲレートーンの図は註14による）

層位（図11）

調査区の層位について、主に調査区東壁・南壁断面とやや北寄りのaライン断面をもとに概要を述べる。調査地は以前、畑や水田として利用されていたとのことで、1～5層は現代作土とみられる。4・5層はいわゆる床土で、5層には鉄分の沈着が認められる。この床土は調査区全体で検出されるものではなく部分的に残っている状態で、これは水田として利用された後に、畑として何度か耕作あるいは攪乱されたためであろう。

床土から下層は、河内国分寺に関連する遺構である建物基壇と、その周辺とでは様相が異なり、建物基壇周辺ではシルト～粗砂の耕土（6～8層）が、建物基壇部ではシルトの建物基壇築成土（10・11層）が検出されている。

建物基壇周辺にみられる耕土の6～8層からは、非常に多くの瓦片が出土しており、広範囲にみられる7層には、瓦片以外にも土師器の細片が含まれていた。また6・7層には上層の影響から、マンガンの斑文が著しく認められる。これらの耕土層が後述する建物基壇周辺の整地土、建物基壇に伴う延石、建物基壇に先行する基壇状遺構まで及んでいる。なお9層は建物基壇廃絶以後の遺構である溝1の埋土である。

建物基壇築成土である10・11層には、花崗岩の細礫が多く含まれており、断ち割りをした東壁の状況から二つの層を合わせた厚さは20cmほどであることがわかった。部分的な断ち割りのため量的な点については明確にしがたいが、この層中から瓦片が見つかっている点は注目される。断ち割り部分では下層に玉砂利層が確認されており、これらは後述するように建物基壇に先行する基壇状遺構に伴うものであることが明らかとなっている。

12～14層は建物基壇周辺に盛られた整地土である。それぞれ10～15cmほどの厚さで、現状では基壇状遺構とほぼ同一レベル（T.P.+48.3～48.4m）で検出された。基壇状遺構を挟んだ西側と東側でやや様相が異なり、西側の13層はにぶい黄橙色のシルトで細片～拳大の凝灰岩が含まれているのに対し、東側で検出されている12層は黄褐色の中砂で凝灰岩片などはみられず、地山と区別しにくい状況であった。南壁断面図にはかかっていないが、基壇状遺構上面にも凝灰岩片を含む整地土が存在している。また調査範囲内に限られるが、13層下には部分的に玉砂利層が検出されているのに対し（図12 dライン断面-21・22層下）、12層の直下は地山層（20層）となり玉砂利層が全くみられない点も大きく異なる。

15・16層は建物基壇に伴う延石を設置するための掘形埋土で、上層の15層には細片～拳大の凝灰岩が含まれていた。

17層は建物基壇に先行する基壇状遺構の盛土である。10～15cmほどの厚さで、地山に似たにぶい黄橙色のシルトである。

18・19層は下層遺構の埋土で、平面プランが確認できたのは18層を埋土にもつ溝2のみである。基壇状遺構の敷石がこの溝2埋土上にあることから、基壇状遺構に先行するのは明らかである。

20層は地山である。シルト～細砂で細礫～大礫の花崗岩を非常に多く含んでいる。

遺構

今回の調査によって、河内国分寺に関連する建物基壇とそれに伴う延石列、それに先行する基壇状遺構が発見された。他に溝・ピット・落ち込みを検出しているが、これらはその他の遺構として一括して述べる。

建物基壇（図11～14）

大阪府教育委員会の調査によって、凝灰岩製の延石列の一部とその延石列が鉤の手状に屈曲する部分が見つかっていたが、今回新たに延石列の続きと、さらに同様の屈曲部を調査区西端において検出した。また以前の調査では明記されていなかった、建物の基壇本体部分の基壇築成土が、延石列から北側の範囲で見つかっている。

東西の二箇所で検出されている屈曲部は、内側（基壇側）で計測すると東西幅16m、南北幅1.3mで、基壇本体部分から南側に張り出した状況となっている。この張り出し部と基壇部にみられる築成土は、上部の大半が耕作などで失われているとみられ、延石上面からの高さは15～20cmほどであった。残存していた基壇部の築成土は比較的の厚い一つあるいは二つの盛土層からなるが、張り出し部ではいくつかの異なる薄い層で構成され、さらに延石上に置かれた石材を固定する裏込め土とみられる層も確認されている（図13 e ライン断面－6～15層）。ただ張り出し部でも、単層で構成されている箇所もあり（図12 b ライン断面－20層）、部分的な断ち割りのため全容を明らかにはできないが、基壇部と張り出し部、さらにはその張り出し部でも場所によって異なる築成方法が採られていた可能性が高い。

基壇化粧は、検出した延石列とともに原位置ではないものの地覆石も見つかっていることから、塔基壇と同様、凝灰岩製の壇上積基壇と考えられる。延石・地覆石は、いずれも二上山産出の凝灰角礫岩である（註5）。今回の調査範囲内において延石は21個分見つかっており、以前の調査では、今回の調査区の最も東端に位置する延石から、さらに4個の延石が続く。建物基壇の規模を推定すると、張り出し部は東西16m、その東側は以前の調査部分を加えると5.2m延びており、張り出し部の西側も同様と推定すると、合わせて東西の長さは少なくとも26.4m以上あるといえる。基壇の南北の長さについては、北辺の延石がみつかっていないため明確ではないが、今回検出した延石から北へ7.2mを測る調査区の最北部でも延石あるいはそれが置かれていた形跡がないことから、南北の長さは約8m以上（張り出し部では約9.3m以上）と推定できる。

検出した延石には、便宜上、番号を付している（図14）。調査区東側の延石は比較的残りのよい状態であったが、西側のものは全体的に遺存状況が悪く、攪乱などによりかなり破損が激しいもの（延石1～5・7・9・10）や、わずかに一部分しか残っていないもの（延石6・8）がある。残りのよい延石から形状をみると、長辺100～104cm、短辺34～36cmの長方形で、唯一延石17のみが長辺約40cmで正方形に近い形状をしている。厚さは、ほとんどの延石がその下端まで検出していないためはっきりしないが、断ち割りによって下端を検出している延石12をみると、北側で14cm、南側で8cmと南側が低くなっているのがわかる（図14 ⑫）。遺存状態の良い延石11・13～21でも同様の状況で、これは基壇外側にあたる延石の南側（延石19は東側）が、風雨などの影響を受け、

1. 桜原「(10YET) シルト しきる」<武士>

2. 黒川「(25Y) 綿 綿がり、花咲(綿被) 多く含む <紳士>

3. 黒川「(25Y) 綿 綿がり、花咲(綿被) 多く含む <紳士>

4. 黒川「(25Y) 綿 綿がり、花咲(綿被) 多く含む <紳士>

5. 桜原「(10YET) シルト しきる」<武士>

6. 桜原「(10YET) シルト しきる」<武士>

7. にじふく「(10YEN) シルト しきりあり、花咲(綿被) 合み、マンダム文部省 <紳士>

7. にじふく「(10YEN) シルト しきりあり、花咲(綿被) 合み、マンダム文部省 <紳士>

8. にじふく「(10YEN) シルト しきりあり、花咲(綿被) 合み、マンダム文部省 <紳士>

9. キジラ「(23Y) 純粋 動物あり、丘陵(純粋) 含む <准士官成上>

10. にじふく「(10YET) シルト しきりあり、花咲(綿被) 多く含む、マンダム文部省 <准士官成上>

11. にじふく「(10YET) シルト しきりあり、花咲(綿被) 多く含む <准士官成上>

12. 黄葉「(25Y) 中山 花咲(綿被) 多く含む、ヒンダンヌ文部省 <准士官成上>

13. にじふく「(10YEN) ブルト しまりあり、花咲(綿被) 多く含む <准士官成上>

14. にじふく「(10YEN) ブルト しまりあり、花咲(綿被) 多く含む <准士官成上>

15. オリバー「(25Y) 中山 花咲(綿被) 大體多く含む、浅見(オリバー) 人合む <准士官成上>

16. 黒川「(25Y) 中山 花咲(綿被) 大體多く含む、浅見(オリバー) <准士官成上>

17. にじふく「(10YEN) シルト しきりあり、花咲(綿被) 多く含む <准士官成上>

18. 黒川「(25Y) 中山 花咲(綿被) 大體多く含む <准士官成上>

19. キジラ「(23Y) 中山 動物あり、丘陵(純粋) 含む <准士官成上>

20. 黄葉「(25Y) 中山 動物あり、丘陵(純粋) 含む <准士官成上>

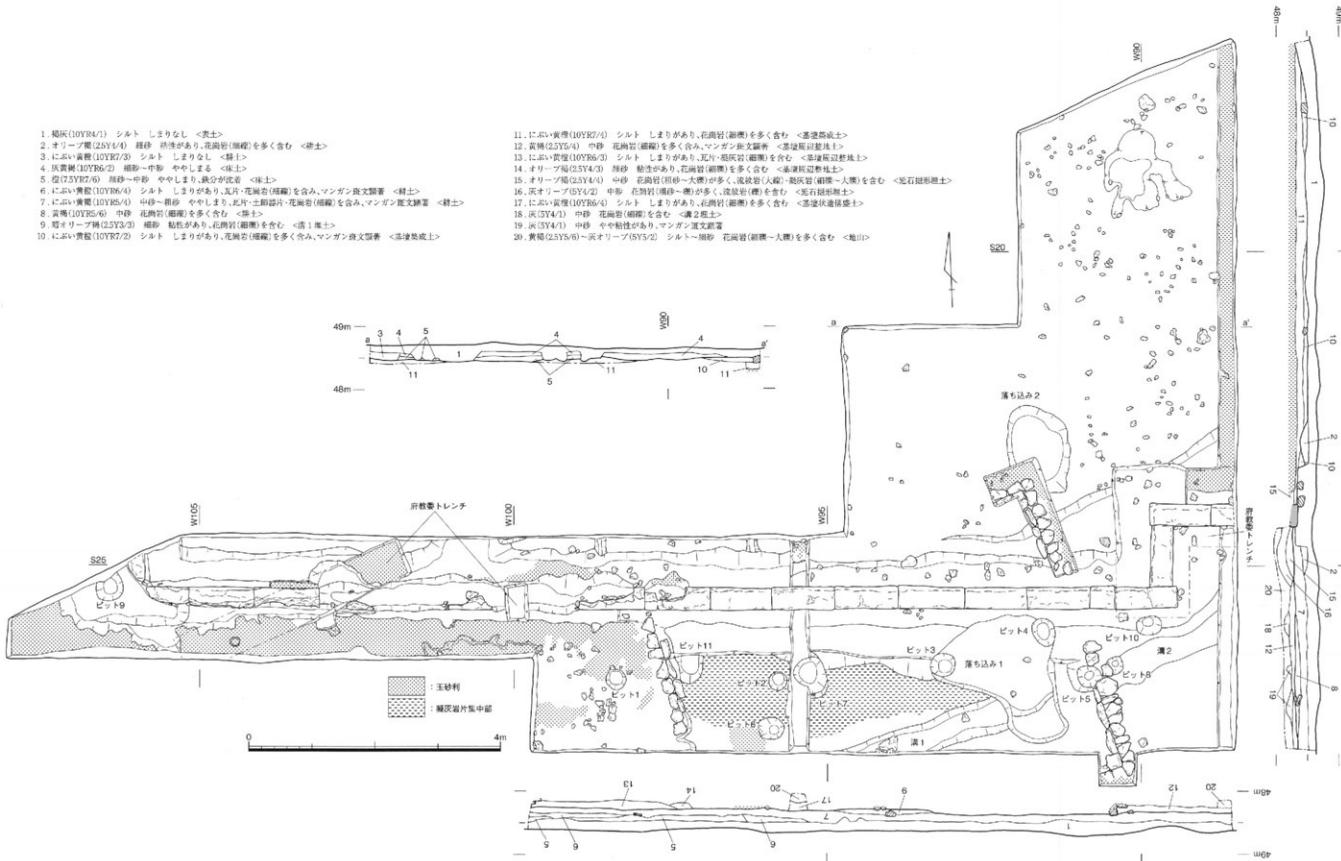
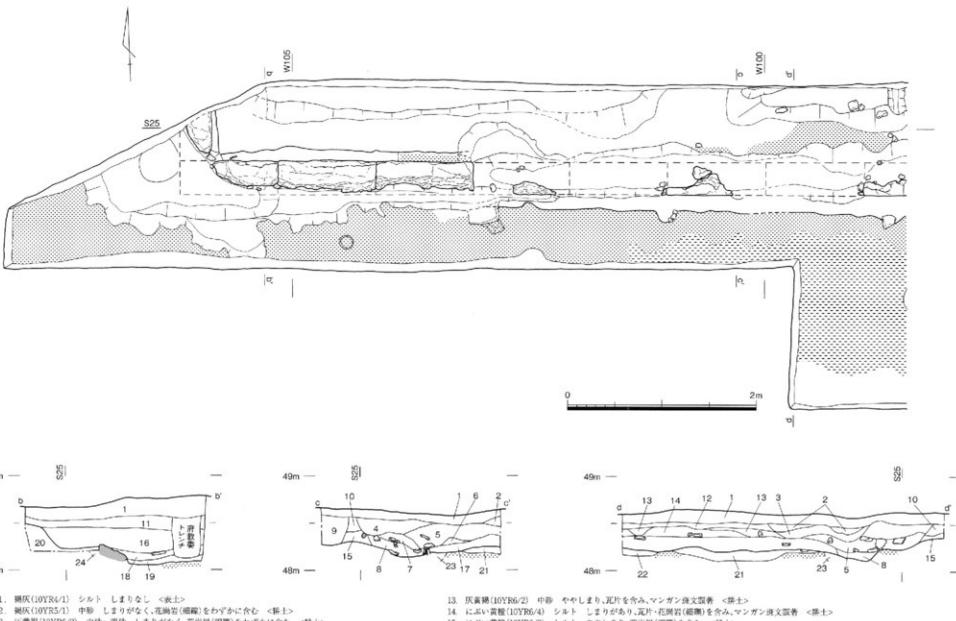


図11 調査区全体図



1. 延灰岩(10YR6/1) シルト しらりなし <鉢土>
2. 岩灰岩(10YR2/1) 中砂 しまりがなく、花崗岩(細礫)をわずかに含む <鉢土>
3. 水質灰岩(10YR6/2) 中砂 しまりがなく、花崗岩(細礫)をわずかに含む <鉢土>
4. 岩灰岩(10YR6/1) 砂綈一半砂 しまりがなく、花崗岩(細礫)を含み、マングン質文脈岩 <鉢土>
5. 岩灰岩(10YR3/1) 中砂 しまりがなく、花崗岩(細礫)を含む、主砂利を含む <鉢土>
6. にじいろ質灰岩(10YR6/1) シルト しまりがなく、花崗岩(細礫)を含み、マングン質文脈岩 <鉢土>
7. 岩灰岩(10YR6/1) 砂綈 しまりがなく、花崗岩(細礫)を含む <鉢土>
8. にじいろ質灰岩(10YR6/2) シルト ややしまり、花崗岩(細礫)を含む <鉢土>
9. 岩灰岩(10YR5/2) シルト しまりがなく、花崗岩(細礫)をわずかに含む <鉢土>
10. 岩灰岩(10YR3/1) シルト ややしまり、花崗岩(細礫)をわずかに含み、マングン質文脈岩 <鉢土>
11. 岩灰岩(10YR6/2) 砂綈一半砂 ややしまり、下部砂利が粗粒 <鉢土>
12. 岩(51R8/6) 砂綈 中砂 ややしまり、既分か化岩 <鉢土>
13. 岩灰岩(10YR6/2) 中砂 ややしまり、瓦片を含み、マングン質文脈岩 <鉢土>
14. 岩灰岩(10YR6/1) 中砂 ややしまり、瓦片を含む <鉢土>
15. にじいろ質灰岩(10YR5/2) シルト ややしまり、花崗岩(細礫)を含む <鉢土>
16. にじいろ質灰岩(10YR5/4) 砂綈 しまりがあり、上部一層砂利・花崗岩(細礫)を多く含む <鉢土>
17. にじいろ質灰岩(10YR5/4) 中砂 ややしまり、瓦片・細砂利・花崗岩(細礫)を含み、マングン質文脈岩 <鉢土>
18. 岩灰岩(10YR4/2) シルト・細砂 しまりがなく、瓦片を含み、上半部軟化現象あり <鉢土>
19. にじいろ質灰岩(10YR5/4) シルト よりもより、花崗岩(細礫)を含む <基盤地盤上>
20. にじいろ質灰岩(10YR5/4) シルト よりもより、花崗岩(細礫)を含む <基盤地盤上>
21. にじいろ質灰岩(10YR6/3) シルト 22壁となるが、花崗岩(細礫)一層を多く含む <基盤地盤整地土>
22. にじいろ質灰岩(10YR6/3) シルト よりもより、花崗岩(細礫)を含む <基盤地盤整地土>
23. にじいろ質灰岩(10YR6/3) シルト よりもより、花崗岩(細礫)を含む <基盤地盤土>
24. にじいろ質灰岩(10YR6/3) シルト よりもより、花崗岩(細礫)が多く、花崗岩(細礫)を含む <基盤地盤土>

図12 建物基壇平面図および断面図（1）

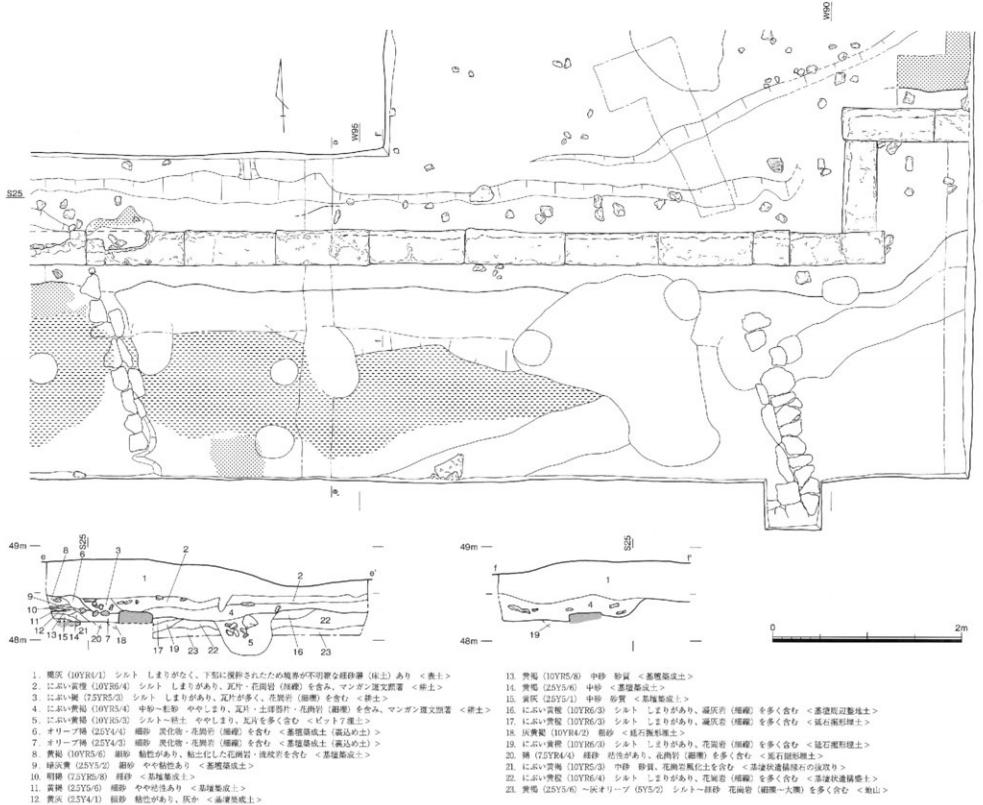


図13 建物基壇平面図および断面図（2）

摩滅・風化したためとみられる。そのように考えると、この建物基壇が機能していた段階では、延石が地表面に露出していたことになる。逆に反対の基壇側は、比較的平坦で角が銳利に残っている。この違いは延石上面でも風蝕差として観察でき（延石11～21）、平坦面の幅は6～8cmほどで、おそらくこの幅で地覆石が置かれたものとみられる。

また張り出し部のほぼ中央に位置する延石10は、他の延石にはない特徴があり、上面中央南寄りに柄状の突起が左右に2つ、南東側には切り込みのようなものがみられる。突起は約7cm四方のほぼ方形で、摩滅しているものの3～4cmほどの高まりとして削り出されている。切り込みについては、当初亀裂と思われたがひびが周囲に巡っておらず人為的なものである。丁寧に作られている様子から後世に手が加えられたものとは考えにくく、ほぼ中央に位置する延石であることも考慮すると、何らかの意図をもって造られたとみられる。

延石の掘え付けについては、延石列南側では一部を除いて建物基壇周辺の整地土を取り除いていることから、掘え付けのための掘形が比較的明瞭に観察でき、延石9以西では基本的に玉砂利敷が途切れるラインがそれに相当している。ただし延石6以西は搅乱が及んでいるため不明瞭である。一方、延石列北側では表込め土とみられる層が残存していたため、断ち割り以外の場所では掘り下げていない。そのため北側の掘形が検出されたのは延石12・20・21となっているが、延石1の東側、延石2～4の北側では表込め土がほとんど残っておらず、耕土を除去すると掘形が確認された。

断ち割りの状況から、地山もしくは玉砂利層を深さ30cmほど掘り込み、そこに土を盛り延石を設置、さらにその周辺を埋め戻している（図11 東壁-15・16層、図13 eライン-17～20層）。ただ掘形の幅をみると、延石12の地点では約90cmに対し、延石21の地点では約150cmと差があり、屈曲部では比較的広い範囲を掘り込んでいるようである。延石列の西側では断ち割りを行っておらず、また搅乱が及んでいるため掘形の幅は明確ではないが、延石2～4の北側の掘形と、搅乱の及んでいない延石7～8の南側の掘形（玉砂利敷の途切れるライン）から復元すると、幅は60cmほどで東側に比べ狭い。また深さについても、延石4の数cm下に玉砂利層があることから（図14 ④）、比較的浅い掘り込みとみられる。東側と西側にみられる掘削幅・深度の違いは、おそらく地形と、延石を設置した順番に起因するものであろう。張り出し部南辺の西壁（延石2）と東端（延石18）の延石上面の平坦面のレベルをみてみると、比高差が8cmほどあり、西側に向かって緩やかに下っている。また建物基壇に先行する基壇状遺構に伴う玉砂利敷のレベルをみても、調査区の西壁と東端（延石21の北側）とでは、西側が約10cm低い。これは東西で見た場合、本来の地形が東から西へ下っていたことを示している。そして延石の設置を西側から行った場合、東に向かうにつれて地形が高くなっていることから、延石のレベルを合わせようすると自然と掘り込みは深く、広くなっていく。今回検出した延石で唯一正方形の延石17は、西側から設置していった結果、張り出し部の長さを調整するために置かれた可能性が考えられる。

おそらく延石列の掘え付け後、基壇上部の構築とともに建物基壇周辺には整地土が盛られ、周囲の整備も進められたとみられる。この整地土は調査区西側では搅乱により失われていたが、中央から東側にかけては厚さ10～15cmほど残存しており、特に中央近辺の整地土には凝灰岩片が含まれ

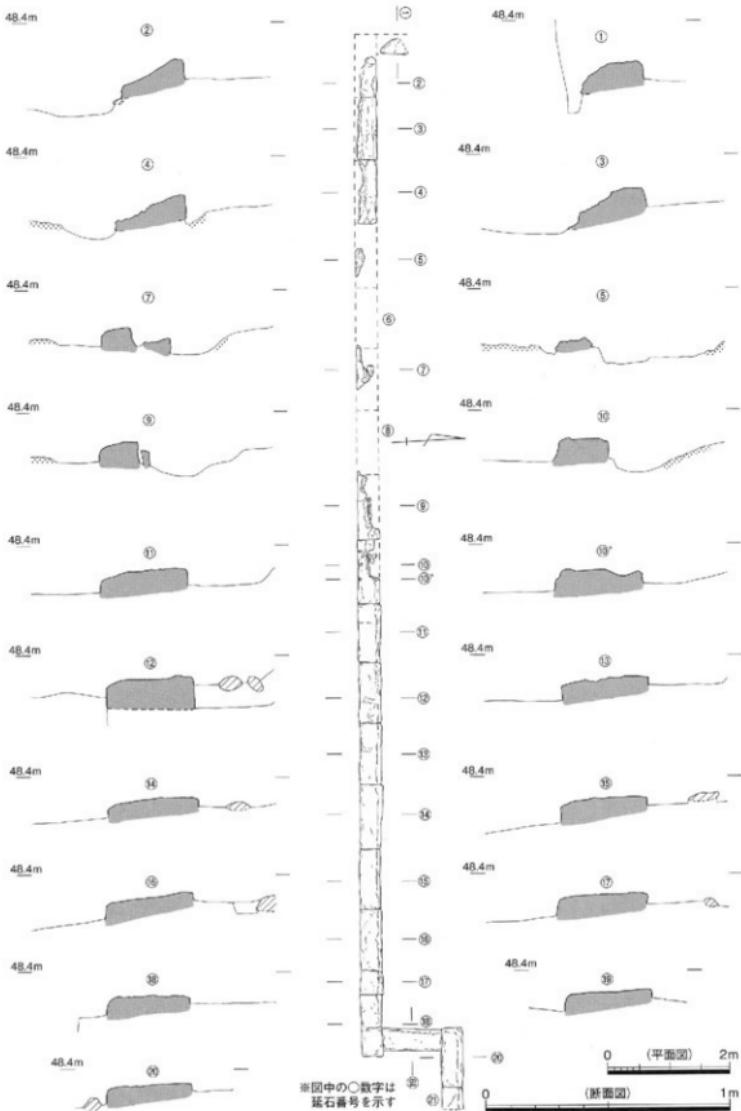


図14 延石断面図

ていた（図12 c・d ライン-21・22層、図13 e ライン-16層）。これらの凝灰岩片は建物基壇に伴う地覆石や羽目石などの凝灰岩製の石材を設置する際の加工屑とみられるが、その分布の偏りについては、石材の形状や大きさを調整する作業場所の違いに起因する可能性などが考えられるものの、明確な理由は不明である。

この整地土に関連して問題となるのが、延石列とこれに先行して存在していた基壇状遺構の縁石との関係である。基壇状遺構の詳細は後述するが、縁石は基壇状遺構の盛土の外縁に立てて並べられており、その周囲には扁平な敷石が巡る。延石列は、基壇状遺構の盛土と縁石・敷石の一部を壊し、据えられているが、立面図から明らかのように縁石の上面は、延石上面よりも高い（図15）。具体的にその差は、基壇状遺構の東辺で最大8cm、西辺で最大5cmとなる。先に述べたように延石が地表に露出していたとすると、その周辺に盛られた整地土は、延石上面より数cmは低い状態であったとみられる。仮にその整地土がほぼ水平に盛られていたとした場合、縁石は地表面から場所によっては10cmほど出ていたことになる。しかし建物基壇の張り出し部のほぼ正面にあたる場所に、縁石がいくつも突き出していた状況は想定しにくい（註6）。以上のことから考えられるのは、整地土は水平ではなく、延石列から南側に向かって上るように斜めに盛られていた可能性である。やや傾斜をつけて土を盛ることによって縁石が覆われ、延石列は地表面に出ていることになるので、延石上面に風蝕差が観察される状況とも矛盾しない。基壇状遺構上面の整地土が南側で途切っている（図13 e ライン-16層）、これは南側に向かって高く盛られていた整地土が、耕作によりほぼ水平に削平されたためとみられる。先行する基壇状遺構を一擧することなく、延石を設置する範囲のみを壊し、かつ整地土で縁石を覆い隠すようにしている状況から、慌しく建物基壇の構築が進められた様子が窺える。

地覆石は延石1の西側、耕土中（図12 b ライン断面-16層）から見つかった。遺存状態はあまり良くないが、約20cm四方の直方体とみられ、残存する長さは約50cmを測る。切りかきとみられる段があるが、その段は途中で途切れている。この特徴から、基壇本体部から張り出し部へと屈曲する部分の地覆石か、張り出し部西辺から南辺に屈曲する部分の西辺側に置かれた地覆石が考えられる。本来の位置から出土していないものの出土位置は後者に近いことから、延石1上に置かれていた可能性が高い。なお延石列より30~50cm北側で基壇築成土が段状になっているが、これは地覆石の抜き取りによるものとみられる。

今回の調査では、雨落ち溝といった基壇回りの施設は検出されていない。今回の調査範囲が主に張り出し部に相当することから、調査範囲外にあたる基壇本体部の周囲に雨落ち溝が存在している可能性があるが、以前の調査でもそれに相当する遺構は検出されていないことから、そういった施設はなかった可能性も考えられる。

基壇上の建物については、基壇上部の大半が削平により失われていたため、礎石あるいは柱の抜取り穴などは検出されなかった。従って建物の平面形、規模は不明である。

この建物基壇に関連するとみられる遺物が、主に耕土から出土している（表1）。中でも建物基壇周辺の耕土からは夥しい量の瓦が出土しているが、丸瓦・平瓦が9割以上を占め、軒丸瓦1点、

軒平瓦3点と軒瓦が非常に少ない。出土数でみれば、次いで土師器が多く、細片がほとんどで、全体の形状が窺えるものはわずかであった。他にも須恵器や綠釉陶器、釘や鉤といった鉄製品、壁土なども出土している。

耕土中であるため時間幅のある遺物が混在しており、また時期を明確に推定できる遺物も少ない。ただその中でも、奈良時代中～後半の均整唐草文軒平瓦（2）や、平安時代の単弁八葉蓮華文軒丸瓦（1）、土師器の椀（77）などの遺物は、この建物基壇の大まかな創建～廃絶時期を示すものと推定される。調査範囲や資料も限られていることから、この建物の時間幅については、さらなる調査の進展をまって検討したい。

以上の調査成果から、建物の性格を考えてみると、一連の延石列の上に構築された凝灰岩壇上積基壇であること、塔と同じ基壇構造で軸方向も一致すること、8世紀中葉以降に建造されたこと、比較的広い丘陵上の平坦面の南側に位置していることなどから、塔よりもわずかに南に位置しているという問題点はあるものの、從来から云われているような河内国分寺の中門と回廊とするよりも、むしろ伽藍の中心建物である金堂の可能性があることを指摘しておきたい。

その場合、張り出し部は基壇南辺に付く階段と考えられる。通常、奈良時代以前の寺院の金堂の階段は柱間1間程度であるが、建造時期が8世紀中葉以降であれば、興福寺や新薬師寺などの事例もあり（註7）、国分寺としては初めて確認されることになるが（註8）、およそ16mという幅の広い階段であっても問題はないと思われる。また、基壇の高さを復元してみると、張り出し部分の南北幅は1.3mであり、これに塔の階段と同様の45°の傾斜をもつ階段が付くとすれば、基壇本来の高さは1.3m程度であったと推定される。

基壇状遺構（図15）

調査区の南東側で検出された東西方向に長い平面長方形の遺構である。南側と建物基壇築成土にかかる北辺の一部は未調査で、また北西隅付近と東辺の一部は、延石設置の影響で破壊されている。断ち割りにより、遺構は10～15cmほどの盛土で構築されていることが判明している（図11 南塼-17層、図13 eライン-22層）。この盛土の外縁に沿って角柱状の礫を立てて縁石とし、その周囲に比較的角が丸く扁平な敷石を巡らせている。縁石を含めた規模は、長軸6.3m、短軸4.7mで、長軸方向は磁北を基準とした場合、約70°東に振る。敷石上面から縁石・盛土上面までの高さは約15cmを測る。

縁石は、いずれも幅10cmほどと揃っているが、長さは15～40cmと大小様々である。上面と外側の面を揃えるように立て並べており、隅部では正方形に近い約20cm大の石を据えている。外側の面にできた縁石同士の隙間に10cm大の小振りの石をいれています箇所もみられ、入念な作りであることが窺われる。石材は坪石安山岩であるが、南東隅から北側へ2番目の縁石のみカンラン石安山岩が使用されている。前者は亀の瀬、後者は芝山産とみられ（註9）、いずれも調査地の北側を流れる大和川沿いにみられる石材である。縁石のレベルは、東辺ではT.P.+48.37～48.40mとわずかに北側が低い。西辺の縁石は4個のみであるが、T.P.+48.33～48.35mとこちらもわずかだが北側が低く、両者を比べると西辺が4～5cm低い状況となる。

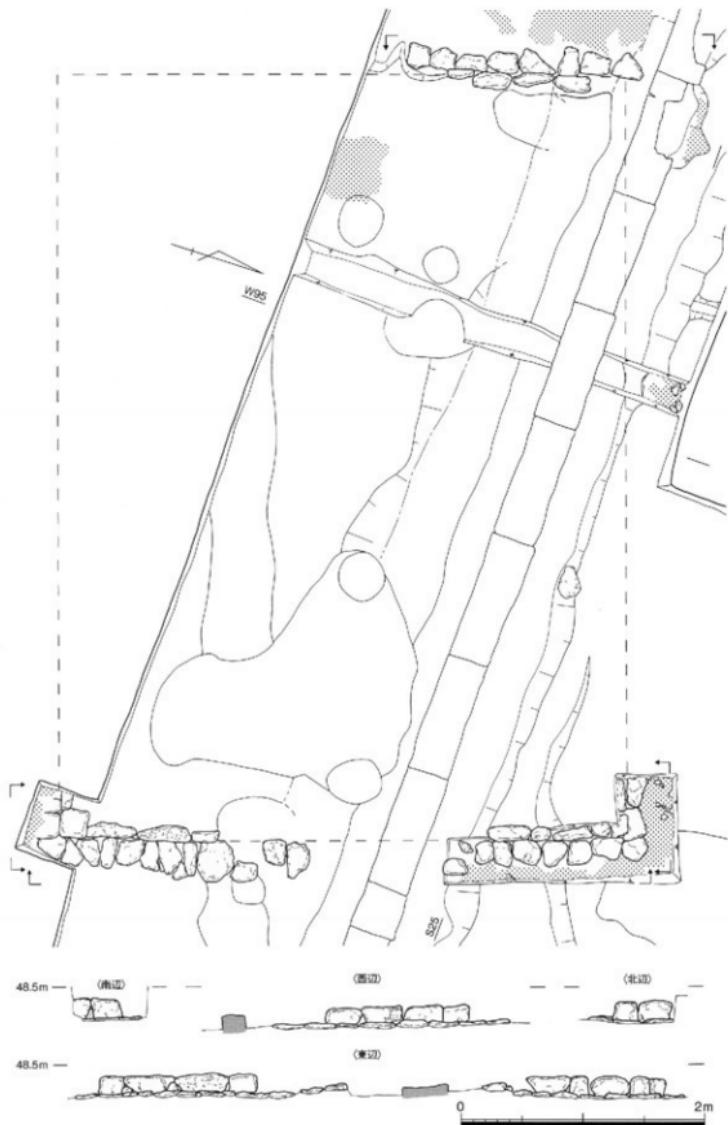


図15 基壇状遺構平面図および立面図

縁石の外側に巡る敷石は10~30cm大の平らな石で、厚さは3~6cmほどとみられる。石材は縁石と同じく、輝石安山岩である。縁石の下部外面に密着させて据え付けられているため、敷石の内側は縁石に沿って直線的に並ぶが、反対の外側部分は揃っていない。東辺での北端と南端の敷石は、ほぼ同一レベルのT.P.+48.25mであるが、中央付近ではT.P.+48.30~48.35mとやや高くなっている。東辺の丁度中央部分は延石設置により破壊され、南北に分断されているが、その北半分の敷石のうち最も南側に位置する2つの石は隣接する北側の敷石より急に一段高くなり、平面上からみても並びからずれているため、延石もしくは地覆石設置の際に本来の位置から移動している可能性が高い。ただし、反対の南半分の敷石はなんだかに高くなり、並びも整っていることから、東辺の中央部の敷石は当初からやや高く据えられていたと考えられる。西辺は、北半分のみしか検出していないが、T.P.+48.20~48.23mと北側がわずかに低い。断ち割りで1個検出した北辺中央付近の敷石の高さはT.P.+48.19mとなっている。すべての敷石を検出したわけではないので不明な点があるものの、全体をみると、南北方向では北に、東西方向では西に向かってそれぞれ低くなっている。なお北東隅から南西に約2mの地点で、長さ約30cmで扁平な輝石安山岩が、建物基壇構成土に埋め込まれたような状態で検出されている。おそらく、建物基壇構築の際に取り外された基壇状遺構に伴う敷石の一つとみられる。

基壇状遺構の周囲には、2~4cm大の玉砂利が敷かれている。石材は花崗岩が最も多く、次いで砂岩や流紋岩がある。石材の構成から、調査地から西に3kmほどの場所に流れる石川で採集されたものとみられる（註10）。この玉砂利敷は以前の調査でも検出されており、延石列の北側でしかみられなかったことから『（建物）基壇の基盤』（括弧内－筆者）として認識されていた。しかし今回の調査によって、延石列の南側でも玉砂利敷が見つかり、また断ち割りによって基壇状遺構の盛土内には玉砂利敷が存在せず、敷石を境として基壇状遺構の外側に玉砂利敷が広がることが確認された。玉砂利は基本的に隙間なく密に敷き詰められており、その厚さは5~10cm近くはあるとみられる。敷石から約10m離れた調査区西端部や、約8m離れた調査区北端部でも検出されていることから、少なくとも基壇状遺構から半径約10mの広範囲に渡って玉砂利が敷かれている可能性がある。ただし、基壇状遺構の東側と西側の一部では玉砂利敷がない空白地帯があり、当初から敷かれていなかったのか、建物基壇構築の際に削平され失われたのかは明らかにできなかった。

基壇状遺構上面において、柱穴もしくは礎石などは検出されていない。しかし後続する建物基壇の周辺整地土や、基壇状遺構北側の盛土を覆っている建物基壇構成土を完全には取り除いていないため、建物が伴っていないかったとは言い切れない。また基壇状遺構盛土上面の西側で、約50cm四方の範囲に周囲と同様の玉砂利が敷かれていることが注意される。これが礎石の根石のような役割を果たしていた可能性も考えられるが、この地点以外にはみられず性格は不明である。

この基壇状遺構に伴う遺物は、後続して築かれた建物基壇構成土内、延石拋形埋土内、基壇周辺整地土内から出土した遺物が相当するとみられる。これらの層からはそれほど量は多くないものの、瓦・埠・土師器・須恵器・鉄釘が出土している（表1）。比較的古い時期に属するものとして、土師器の杯（81）、須恵器の杯蓋（83）があるが、後述するように基壇状遺構よりも古い遺構を検出し

ていることから、それらに伴う遺物である可能性がある。それらを除くと時期を把握できる遺物はほとんどないが、瓦をみると建物基壇との間で大きな時期差は見出しそう。従って基壇状遺構は建物基壇には先行するものの、比較的近い時期に構築されていた可能性が考えられる。

出土した瓦や塼から瓦葺建物の存在が想定されるが、上記のように基壇状遺構に建物が伴っていたという確証は得られていない。今回の調査地が位置する丘陵上には平坦面がまだ残されていることから、関連する別の建物が存在する可能性は高いだろう。基壇状遺構の存続期間・性格については、今後の調査によって解決すべき大きな課題といえる。

その他の遺構（図11）

その他の遺構として、溝・ピット・落ち込みなどが検出された。多くは建物基壇の周辺整地土または延石掘形埋土を掘り込んでいることから、建物基壇廃絶以後の遺構である。溝2・ピット8のみ基壇状遺構に先行する遺構とみられる。

溝は2条検出された。溝1は基壇状遺構上面で検出され、北東-南西方向を直線的に延びる。幅約50cm、深さは約6cmを測る。埋土から平瓦・土師器・須恵器が出土している（表1）。溝2は調査区南東で検出され、幅30~50cmを測る。平面プランのみ確認され、溝埋土上に基壇状遺構の敷石が存在する。周辺から7世紀~8世紀前葉の須恵器の杯蓋（83）が出土しており、この時期に属す可能性がある。

ピットは11基検出された。埋土はほとんどが上層の耕土と同様、黄褐色～灰褐色の中砂～粗砂で、瓦・土師器などが出土している（表1）。深さは、ピット8・11が約10~15cm、ピット1・4・9・10が約20~25cm、ピット2・3・6・7が約30~35cmで、縁石・敷石の一部を破壊しているピット5は約45cmと比較的深く掘り込まれている。ピット8は掘り込みが敷石の下にあることから、基壇状遺構構築以前の遺構とみられる。

落ち込みは2基検出された。落ち込み1は基壇状遺構上面の東寄りに位置する。南北長約2m、東西長約1.8mで、正な平面形を呈し、その南側には深さ5cmほどの平坦面がある。北側は延石列と隣接していることから、平面プランを確認したのみで完掘していない。溝1を掘り込み、ピット3・4に切られている。落ち込み2は基壇状遺構の北側に位置する。長軸1.5m、短軸1mの平面不整橢円形で、深さは約5cmを測る。検出当初、建物基壇に伴う礎石を据えた掘形の残存かと思われたが、延石列との位置関係からその可能性はないだろう。

遺物

今回の調査では、通常の大きさのコンテナパット（60×40×15cm）にして75箱分の遺物が出土した。いうまでもなく基壇の撤去・削平後の耕作に伴う土層からの出土量が圧倒的に多いが、僅かではあるが基壇の構築に伴う土層からも出土している（表1）。また、これらの遺物のうち70箱は瓦片である。

軒丸瓦（図16）

耕土から単弁8葉蓮華文軒丸瓦が1点出土している（1）。瓦当の直径17.0cm、同厚3.7cm、中房

基本層位	出 土 遺 物
表土	丸瓦、平瓦、塼1、土師器、須恵器、凝灰岩
耕土	軒丸瓦1、軒平瓦3、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、綠釉陶器14、黒色土器、陶器（近・現代）、土鍬1、鉄釘21、鉄鉤1、菱形鉄製品1、銅鏡1、凝灰岩（延石、地覆石1）、壁土2
(落込み耕土)	丸瓦、平瓦、土師器
(溝埋土)	平瓦、土師器、須恵器
(ピット埋土)	丸瓦、平瓦、土師器、凝灰岩
基礎周辺整地土	丸瓦、平瓦、塼2、土師器、須恵器、鉄釘2、凝灰岩
延石削土	丸瓦、平瓦、土師器
基壇築成土	丸瓦、平瓦、土師器
耕土	丸瓦、平瓦、土師器、陶器（現代）、鉄釘、凝灰岩

表1 層位別出土遺物組成表

径6.4cm、弁区径13.6cm、弁幅2.5~2.8cm、外縁幅1.8cm、同高1.5cm。中房の蓮子はかなり欠損しているが、中心から1+4+8の配置・数と思われる。色調は暗灰色~橙色、焼成はやや軟、胎土は精良であるが長石やくさり砾の中~粗砂粒が含まれている。丸瓦部凹面から瓦当部裏面にかけては指ナデ調整、丸瓦部凸面は縱方向のナデ調整である。大阪府による塔跡調査の第6類に相当し、平安時代の瓦と考えられている。

軒平瓦（図16）

耕土から均整唐草文軒平瓦の小片が3点出土している（2~4）。2を観察すると瓦当高5.4cm、内区高25cm、顎幅3.2cmとなる。内区文様は左側に5転する3葉の唐草文であるが、中心飾りから右側は失われている。外区には上下・左右・隅の夫々に1.5~2cmの間隔で珠文を配している。顎の断面形は曲線的で、凹面側では、瓦当面から約8cmの幅で横方向のケズリ調整、他は未調整で8×8本/cmの布目が残り、凸面側では、顎部で横方向のケズリ調整、平瓦部で縦方向のケズリ調整が行われている。色調は灰色~暗灰色、焼成はやや軟、胎土には長石や石英の中~粗砂粒が含まれている。他の資料も2と同じ軒平瓦と考えられるが、色調は浅黄色、黒色を呈している。これらは大阪府による塔跡調査の第2類に相当し、大和川対岸の青谷遺跡（竹原井領宮跡）で主体的に出土する青谷式軒平瓦であり、奈良時代中頃（8世紀中葉）の所産と考えられている。

丸瓦（図16~18、表2）

全て破片ではあるが、行基葺式を示すような丸瓦の一端が細くなる資料は認められなかった。したがって、全て玉縁の付いた丸瓦と思われる。

基壇周辺整地土から出土した丸瓦には、玉縁凸面に細い隆起線の付いたものがある。また6の端面には2条の刻線があり、瓦当に接合する部位かもしれない（表2）。

耕土（表土、ピット埋土含む）から出土した丸瓦には法量を計測できるものがあり、平均すると長さ34.9cm、幅14.9cm、玉縁長4.9cmという数値になる。また、これらの丸瓦の玉縁凸面は平滑に仕

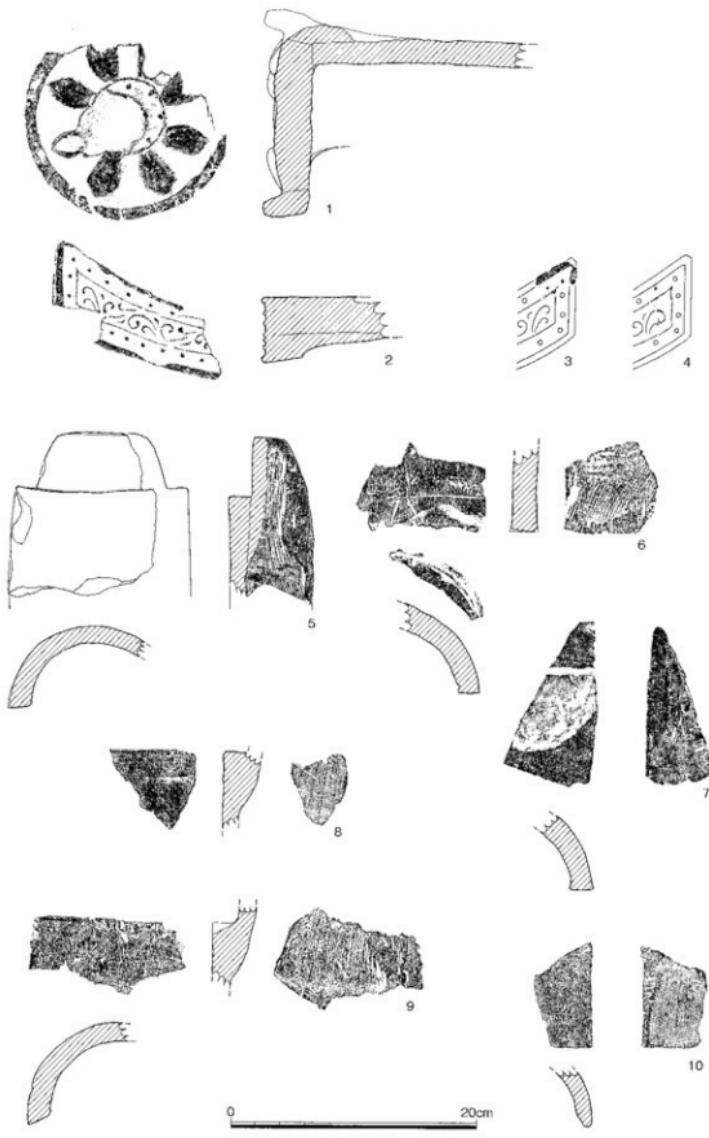


図16 軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦（1）

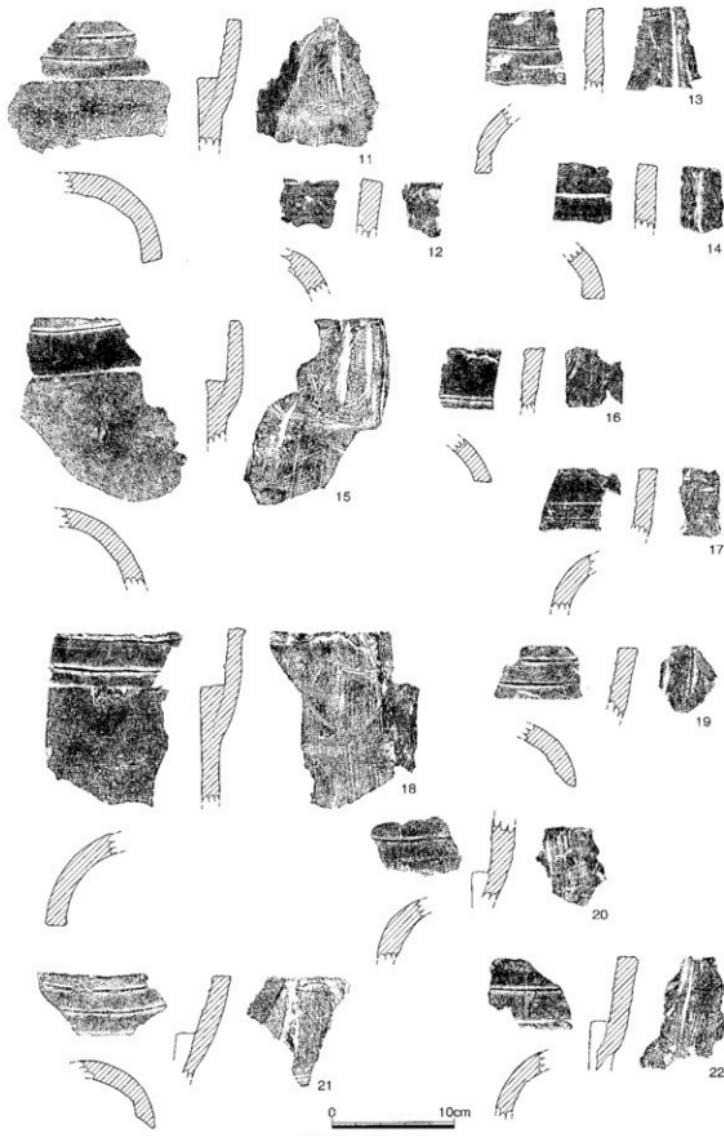


図17 丸瓦 (2)

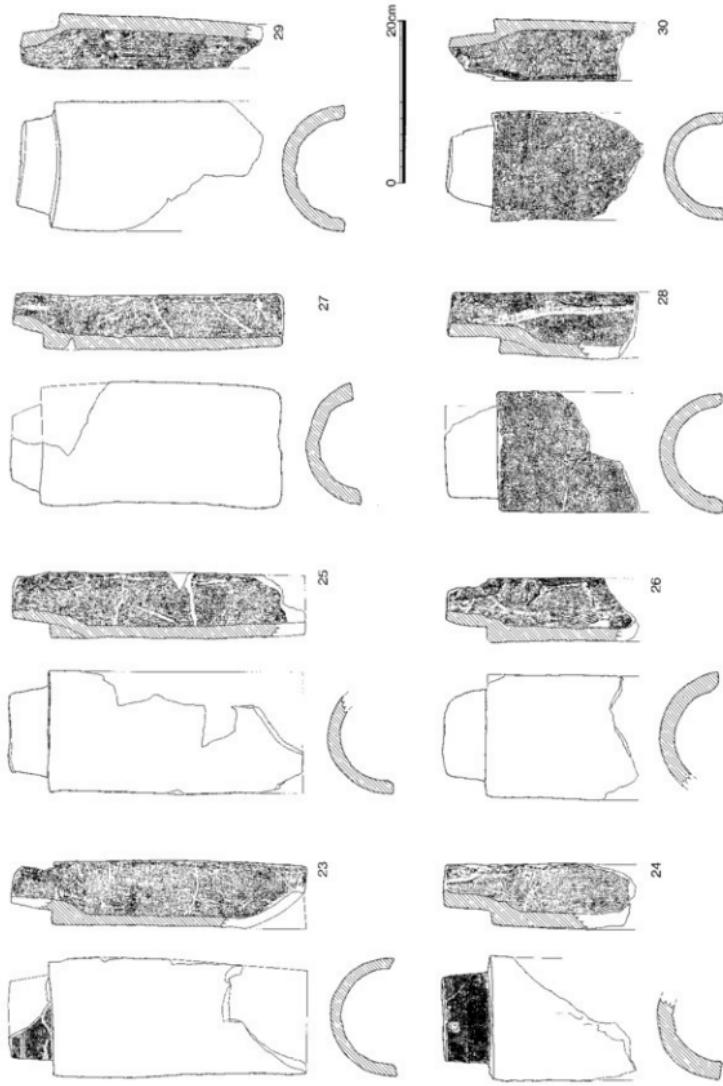


図18 丸瓦 (3)

基本層位	番号	長(cm)	幅(cm)	玉縁長(cm)	玉縁の隆起線(隆)と沈線(沈)
表 土	22			5.3	太隆
	19			4.4	太隆 + 太隆
	11			4.7	太隆 + 太隆
耕 土	30		13.3	5.4	無
	26		15.3	4.8	無
	28		14.8	6.2	無
	29		15.9	4.2	無
	25	35.5	15.0	4.4	無
	27	33.0	14.9	3.7	無
	23	36.1	14.8	5.4	細隆
	24		15.4	5.5	細隆
	12				細隆 + 細隆 + 細隆
	15			4.9	太隆
	13				太隆
	20				太隆
	16				太隆
(ピット埋土)	21			4.6	太隆 + 太隆
	17				細沈 + 細隆
	14				細沈 + 太沈 + 細隆
	18			4.6	細隆 + 太隆
基壇周辺整地土	5			5.0	無
	7			4.4	細隆
	6				?、専部端面に1条の隆線(2条の沈線)
延石埋土	9				?
基壇築成土	10				?
	8				?

表2 丸瓦観察表

上げられることが普通であるが、数は少ないものの隆起線や沈線が付いたものもみることができる(表2に示したものが全てである)。こうした玉縁は青谷遺跡でも注意されている(註11)。

平瓦(図19~25、表3)

平瓦の凸面のタタキ痕を観察すると、その大半が縦方向の繩目タタキであり、格子、綾杉、斜方向・鋸歯状繩目などのタタキ痕をもつ平瓦は出土しなかった。

基壇の構築に伴う土層から出土した平瓦は、数も少なく、いずれも碎・小片のため大きさを復元することは困難である。ただし、一部に大きさの判るものがあり、例えば基壇周辺整地土の資料には長さ35cm前後の平瓦が含まれている。また、凸面の繩目は3cmの幅に4~5本、凹面の布目は1cm四方に経・緯糸が10~11・10本といった平瓦が多いようである。なお、一部の平瓦凹面には枠板(模骨)らしき痕跡が認められるが、小片のため断定することは難しい。

耕土(表土も含む)から出土した平瓦は、数量的には出土遺物の大半を占めているが、その大半は小片である。したがって、図化あるいは大きさを計測して報告できる資料は極一部に限られるが、大まかな傾向を読み取ることは可能であろう。

これらの平瓦の大きさを平均してみると、長さ34.8cm、幅26.9cmという数値を得ることができる。

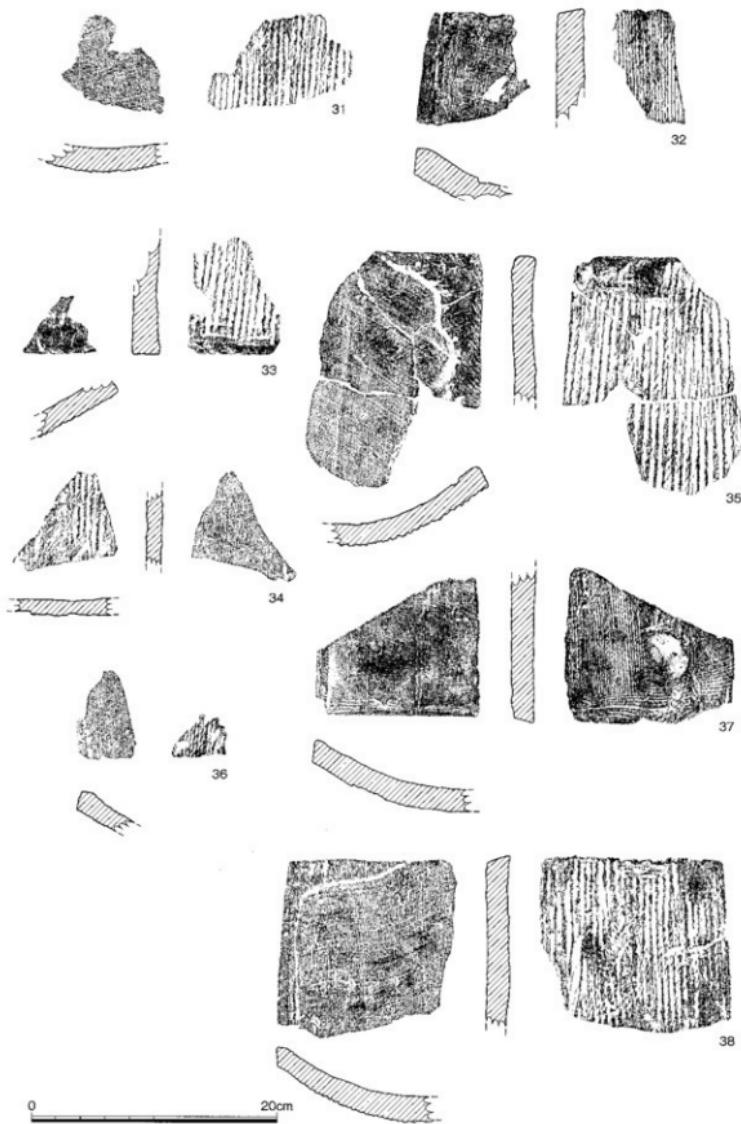


図19 平瓦 (1)

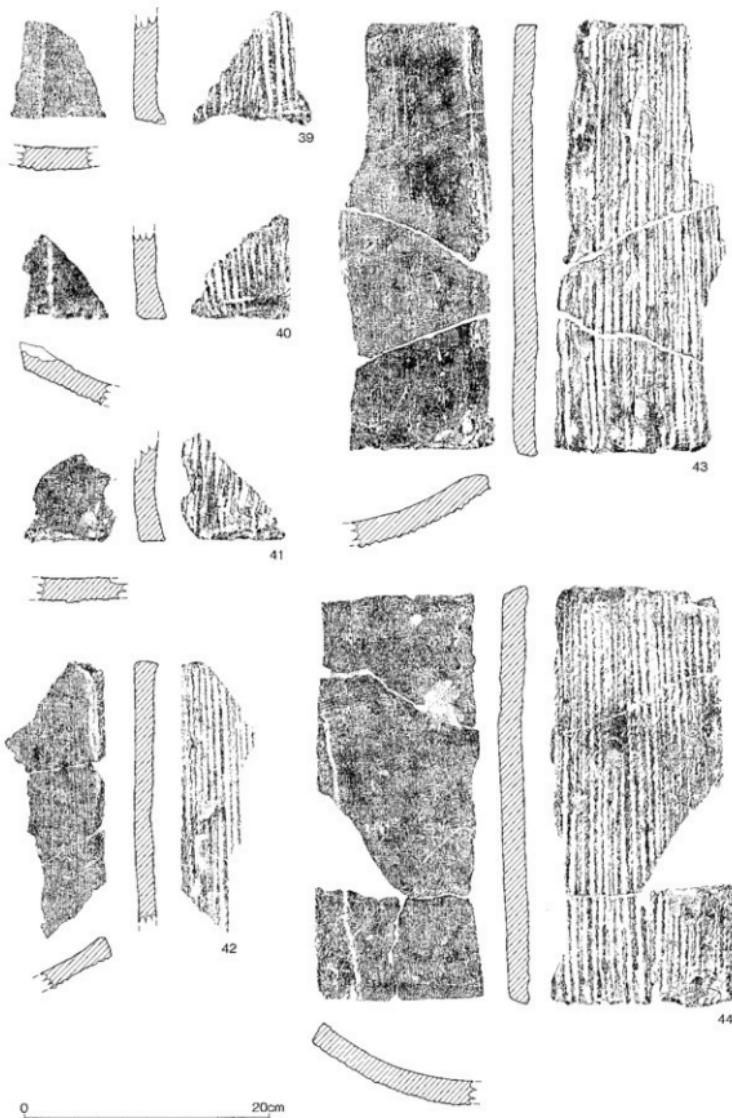


図20 平瓦(2)

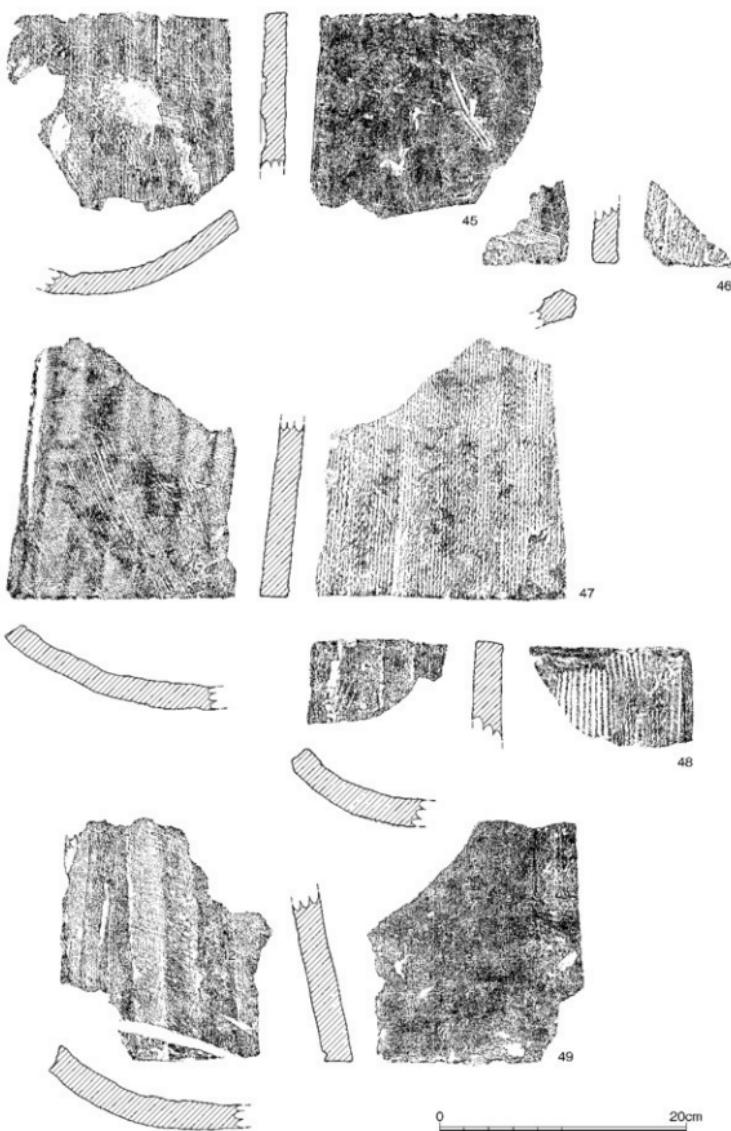


図21 平瓦 (3)

0 20cm

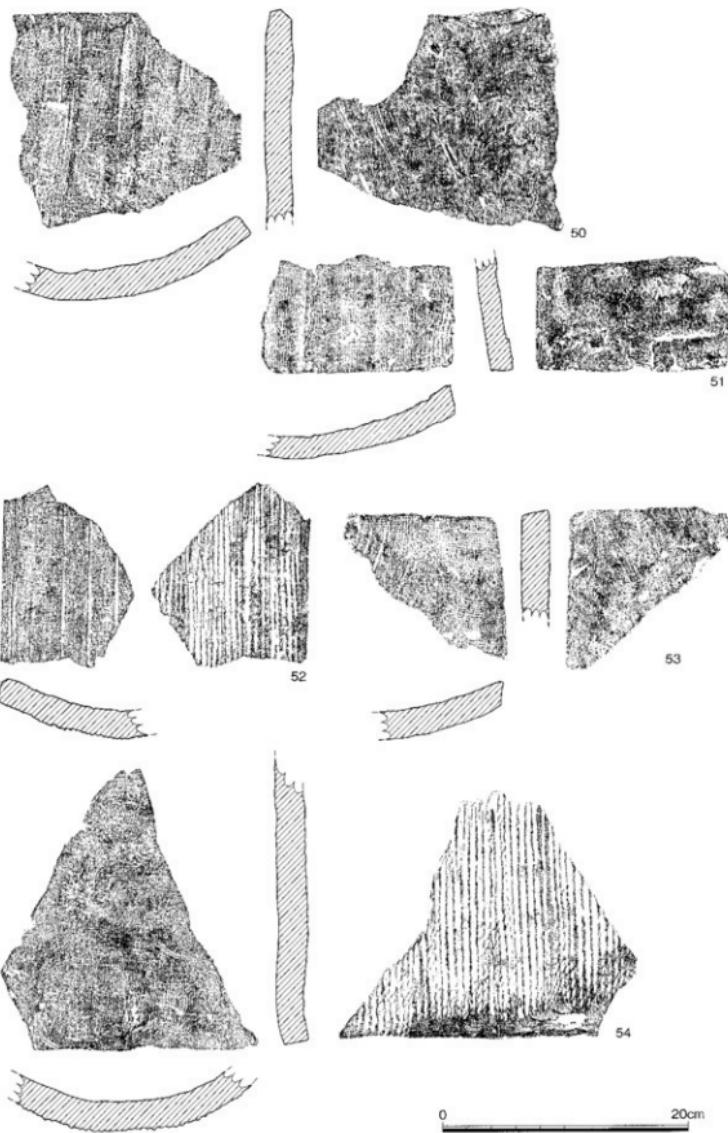


図22 平瓦 (4)

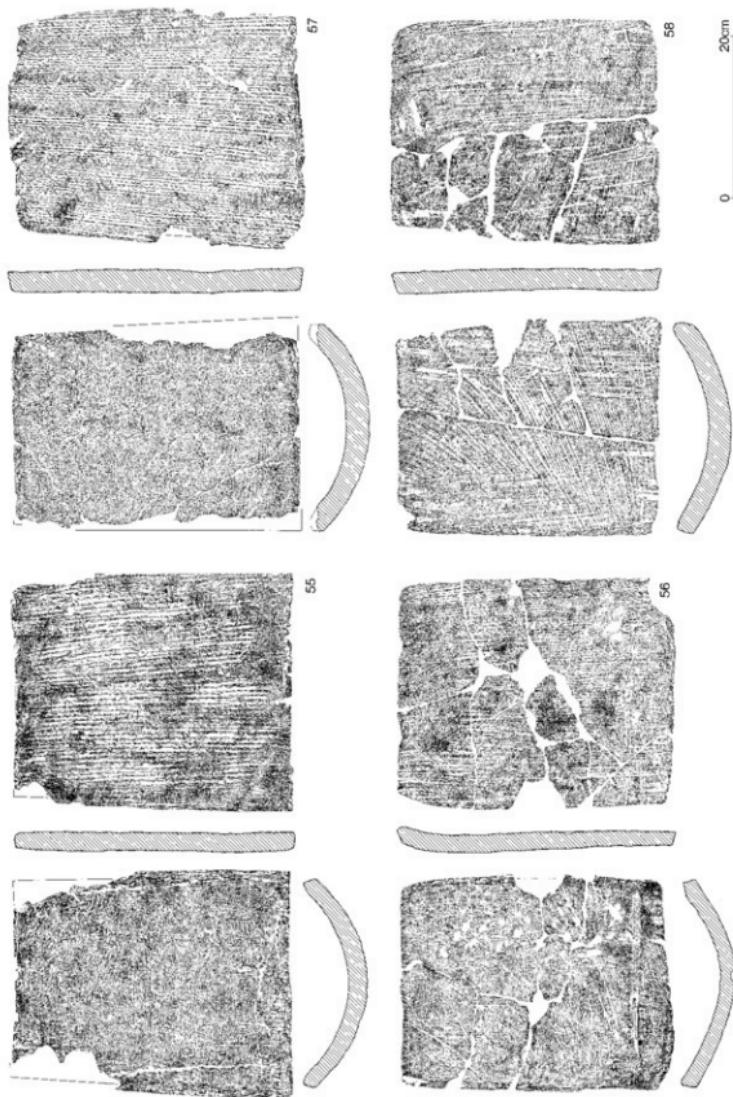


図23 平瓦（5）

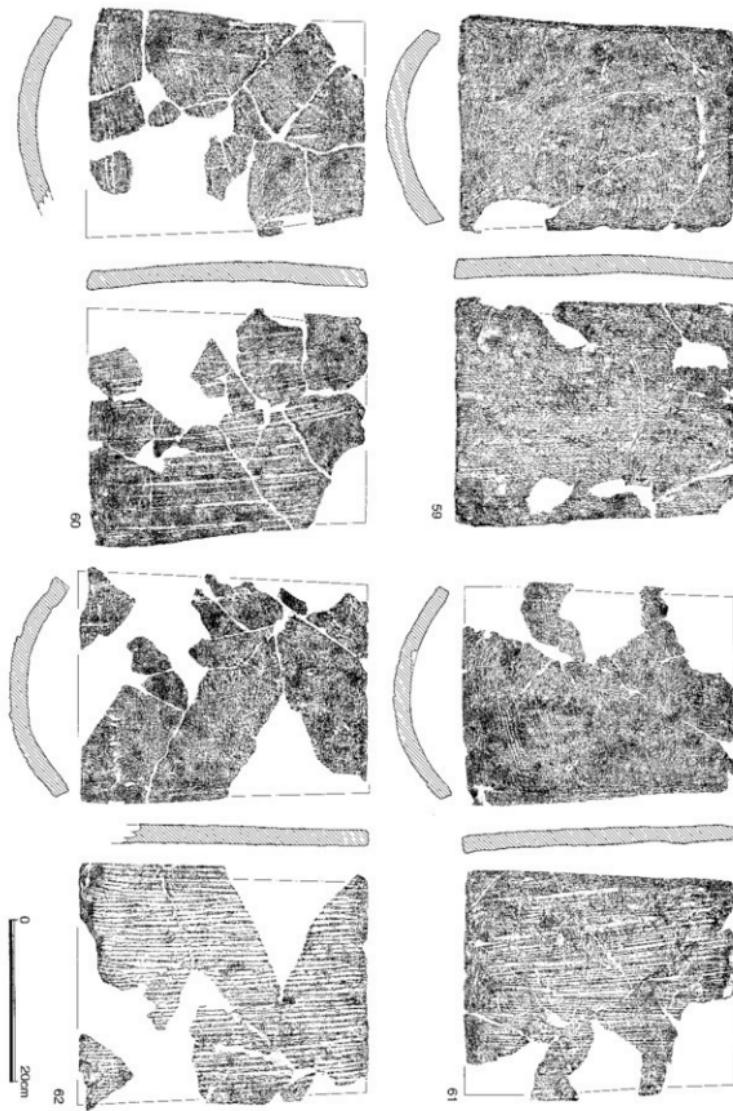
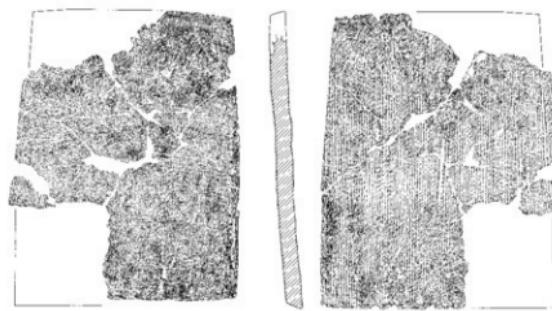


図24 平瓦 (6)

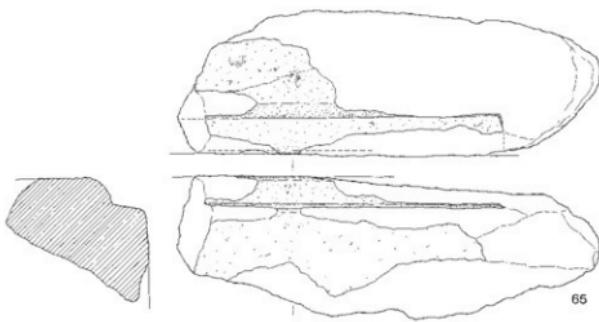


63



64

0 20cm



65

圖25 平瓦（7）、地覆石

基本層位	番号	長(cm)	幅(cm)	重(kg)	枠板痕	凹面	凸面	その他の
表土	45				○ 布(6×8本/cm)		ナデ	
	50				○ 布(6×8本/cm)		ナデ	
	60	34.1	28.3		布(?)		縄(?, 4~5本×?粒/cm)	
緑土	52				○ 布(9×10本/cm)		縄(?, 7本×?粒/cm)	凸面布痕
	47				○ 布(7×9本/cm)		縄(左, 10本×4~6粒/3cm)	
	51				○ 布(6×8本/cm)		ナデ	
	49				○ 布(7×8本/cm)		ナデ	
	48				? 布(?)		縄(左, 6~7本×5粒/3cm)	凸面布痕(8×8本/cm)
	64	37.9	27.1		? 布(8×8本/cm)		縄(左, 12本×9粒/3cm)	
	54				右(8×10本/cm)		縄(左, 5本×4粒/3cm)	凸面布痕(?, 6本/cm)
	62	35.5	28.6		右(8×8~9本/cm)		縄(左, 5本×5~6粒/3cm)	
	55	34.2	26.7	3.7	布(6×6本/cm)		縄(左, 5~6本×?粒/3cm)	
	○ 34.7				布(8×7本/cm)		縄(左, 6本×4粒/3cm)	
	56	33.7	25.6	2.9	布(5~6本×5~6本/cm)		縄(左, 6~7本×6粒/3cm)	
	57	35.8	26.4	4.2	布(6×6~7本/cm)		縄(左, 8本×4粒/3cm)	
	61	33.1	26.8		布(8×9本/cm)		縄(左, 8本×6粒/3cm)	凸面布痕
	58	33.0	26.4	3.5	ナデ		縄(左, 9~10本×8~9粒/3cm)	
	63	36.5	27.2		布(7×8本/cm)		縄(左, 10本×6粒/3cm)	
	59	34.5	25.7	3.3	布(7×7本/cm)		縄(左, 11~12本×5粒/3cm)	
基礎周辺整地土	46				布(6×7本/cm)		縄(左, ?)	側面布痕(6×7本/cm)
	53				布(6×5~6本/cm)		ナデ	凸面布痕(凹面と同じ)
	35				? 布(8×7本/cm)		縄(左, 4~5本×4粒/3cm)	
	43	35.2			布(11×10本/cm)		縄(左, 4~5本×4粒/3cm)	
	38				布(8×8本/cm)		縄(左, 5~6本×4粒/3cm)	
	44	34.5			布(12×10本/cm)		縄(左, 6本×4~5粒/3cm)	
延石埋土	37				布(10×10本/cm)		縄(左, 14本×7~8粒/3cm)	
	34				布(縄めて細かい)		縄(?, 6本×?粒/3cm)	極薄
基礎築成土	31				布(細かい)		縄(左, 6本×4粒/3cm)	
	32				布(8~9×8本/cm)		縄(左, 9~10本×4粒/3cm)	
	39				? 布(10×10本/cm)		縄(左, 4本×5粒/3cm)	
	40				布(10×?本/cm)		縄(?, 5本×?粒/3cm)	
	42				布(11×10本/cm)		縄(左, 5本×4粒/3cm)	
	41				布(12×12本/cm)		縄(左, 5本×?粒/3cm)	
	33				布(?)		縄(左, 5本×4粒/3cm)	
	36				布(10×10本/cm)		縄(左, 7本×3粒/2cm)	

表3 平瓦観察表

この数値からみると、例えば58・61はかなり小さな印象を受けるし、逆に64は大きく感じることになる。また凸面のタタキ痕である縄目を観察すると、3cmの幅に5~10本の資料が多く、凹面の布目は1cm四方に絆・緯糸が6~8・6~8本といった資料が多いようである。さらに、明瞭に枠板(模骨)痕が認められる平瓦も存在している。加えて、凸面や側面に布目を留める平瓦もあり、平瓦の製作方法や乾燥方法などを考える上で興味深い資料である。

以上のように、今回出土した平瓦は、全体としては凸面に縦方向の直線的な縄目タタキを施す点

では共通している。その上で、凹・凸面の観察と出土層位を勘案すると、基壇の構築に伴う盛土・整地土層から出土する平瓦（基壇構築に先行して存在した建物に葺かれていた可能性が高い瓦）は、耕土から出土する平瓦（主に基壇上に建っていた建物に葺かれていた瓦）に比べて、凸面の縄がより太く凹面の布目はより細かい、という傾向を指摘できそうにも思われる。

埴（図28）

2種類の埴が出土している。表土から出土した埴は極めて部分的な小片であり（112）、形状や大きさなど全く不明であるが、厚さ2.5cmの突出部があり、おそらく厚さ5cm程度の方形の敷塗の縁辺部と思われる。灰オーリーブ色を呈し、焼成はやや軟らかく、くさり繰や長石の細粒を含んでいる。

基壇周辺整地土から出土した2点の小片は（113、114）、大きさは不明であるが、形状は直方体と思われ、厚さは6.8cmを計測する。いずれも黒色を呈し、焼成は堅緻、胎土には石英や長石の粗粒が多い。昭和45年の大阪府による発掘調査では、「中門・金堂推定遺構の所用」である「幅12.5厘、厚み6.6厘、長さは不明」の埴が、凝灰岩延石の南側のトレンチから1点出土したことが報告されている。この2点の小片も、おそらくこれと同等の埴と思われる。

土器（図26、表4）

今回の調査区から出土した土器はいずれも小片・碎片ばかりで、図化できる資料は少なかった。また図化した土器についても、その殆どは反転復元して図化・計測したものであり、ほぼ完形に近い土器は76・77・82の3点のみであった。

種別	番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	特徴	備考	基本層位
土器	81	杯	(19.0)	(3.9)	放射状・連弧状暗文	スス付着	基壇周辺整地土
	66	皿	(8.6)		「て」の字		耕土
	67	皿	(8.6)		「て」の字		耕土
	68	皿	(9.6)		「て」の字		耕土
	69	皿	(9.0)	(1.5)	(指オサエ)、ナデ		耕土
	70	皿	(9.6)	(1.7)	ナデ		耕土
	71	皿	9.7	2.0	指オサエ、回転ナデ		耕土
	72	皿	(9.8)	(2.4)	ナデ		耕土
	73	皿	(11.0)	(1.7)	(指オサエ)、ナデ		耕土
	74	皿	(16.8)	(1.4)	回転ナデ、オサエ		ピット埋土
	75	皿	(17.0)	(2.0)	ナデ、回転ナデ		耕土
	76	碗	(13.2)	(4.2)	ナデ		耕土
	77	碗	13.2	3.7	指オサエ、回転ナデ		ピット埋土
	78	碗	(14.0)		指オサエ、回転ナデ		耕土
	79	碗	(14.8)		指オサエ、回転ナデ		耕土
	82	碗	14.7	4.2	指オサエ、回転ナデ		耕土
	80	杯(高台) ?					耕土
須恵器	83	杯蓋	(15.0)				基壇周辺整地土
	84	杯(高台) ?					表土
	85	壺(頭) ?					耕土
	86	高杯(脚) ?					耕土

表4 土器観察表

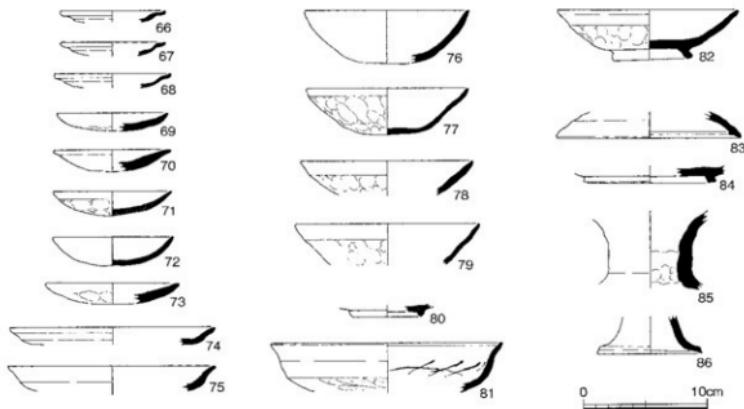


図26 土器

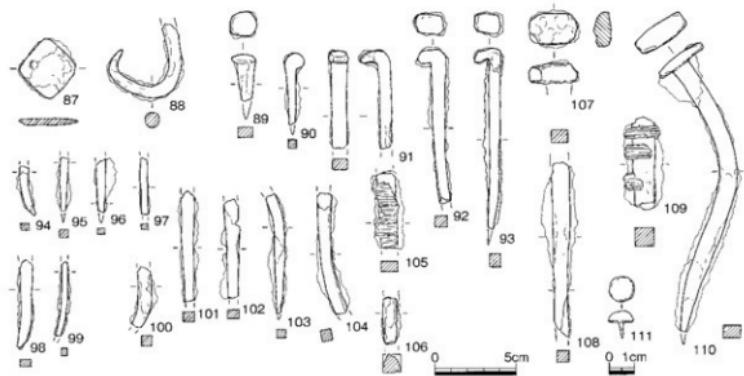


図27 鉄釘、銅鉄

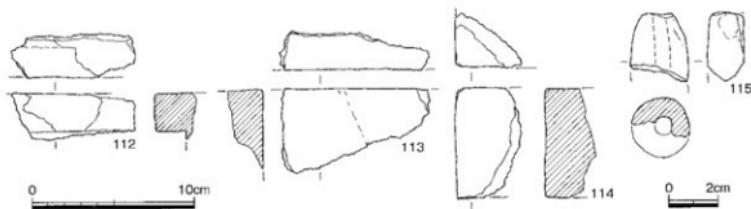


図28 塚、土錐

国分寺の造営に伴う盛土層・整地土層と判断される基壇周辺整地土・延石埋土・基壇築成土から、僅かながら土器の小片が出土している（表1）。時期の明確な資料としては、平城宮Ⅲ期に比定される土師器81や同じくⅠ～Ⅱ期（藤原宮期に遡る可能性もある）に比定される須恵器83があり、国分寺造営前に遡る資料として注意される。

耕土あるいは耕土相当の土層からは、主に土師器の皿・杯・碗の小片や碎片が出土している（表1）。「て」字形の小皿、ナデ調整の小皿、指頭痕が顯著な椀などである。これらの土師器に加えて黒色土器の小片も僅かに認められるが、一方で瓦器は全く出土しなかった。また、土師器の壺や須恵器の壺・壺なども出土しているが、小片で量的にも少なく、図化や法量を計測して時期を明示できる資料は認められなかった。こうした耕土から出土した土器は、概ね10世紀代を中心にして、9世紀後半から11世紀前半の所産と考えられる。

他に縁釉陶器の小片が14点出土している。器形は全く不明であるが、体部～高台部や体部～頸部といった部位の破片が含まれている。胎土は精良で、素地の色調は灰白色～淡黄色を呈し、釉は明るい緑色に発色している。

土錘（図28）

耕土から土錘の破片が1点出土している（115）。残存部は僅かであるが、紡錘形と思われ、端部は小さな面を形成している。最大径は23cm、孔径は6mm。橙色を呈し、胎土には長石の細粒が含まれる。

菱形鉄片（図27）

耕土から出土した長さ4cm×幅3.8cm×厚さ5mm程の鉄片である（87）。

鉄鉤（図27）

耕土から出土した鉤形の鉄製品（88）。断面は径1cm程の円形であり、最大幅は5cmを計測する。

鉄釘（図27）

23点の鉄釘が出土している。基壇周辺整地土の2点（94、104）は、脚部の断面形が方形で、一点は捺じ切れたように歪んでいる。耕土からは20点、排土からは1点（109）が出土している。いずれも脚部の断面形は方形ないし長方形であり、長さが4～5cmで頭部が円頭のもの、5～6cmで頭部が扁平な巻手状のもの、12～13cmで頭部が折曲頭のもの、19～20cmで頭部が長方形状のものなどがあり、一部の釘には長軸に対して直交する木目が残っている。これらは瓦釘あるいは茅負釘などとして使用されたものであろう。

銅鉢（図27）

耕土から銅製の鉢が1点出土している（111）。全面を緑青が覆い、針部分は僅かに曲がっている。頭部は半球形で、直径1.05cm、高さ5mm。針の長さは6mm。

地覆石（図25）

遺物ではないが地覆石と思われる凝灰岩の破片が出土している。長さ51.3cm以上、幅18.1cm以上、高さ17.6cm以上を測り、下面・内側面・小口面は欠損している。外面側の仕様としては上面と側面の交差部が階段状に切り欠かれているが、この切り欠きは一端で途切れています。

この地覆石は、階段（推定）西側縁の延石の上で、切り欠きが途切れた小口側を南に向け、天地を逆転させた状態で出土した。切り欠きの在り方から判断すると、基壇南縁と階段西側縁が交わる入隅部の基壇側の地覆石とも考えられるが、だとすると東石を立てるための枘穴等が見えないのは不自然である。出土状態からすると、当然この地覆石は原位置を保っているわけではないが、ここでは出土位置を重視して階段西側縁の南側の一石と考えておきたい。

まとめ

従来から、今回の調査地が位置する小丘陵には河内国分寺の中心伽藍が存在すると考えられてきた。ここまで報告した調査成果もこうした予測を補強するものである。しかし、新たに小丘陵南側に金堂が想定されることになったため、寺域の南側に屹立する山地急斜面との間にあまり間隔がないことから、金堂の北側に位置するとされてきた講堂はともかく、中門や回廊などの所在はなお一層謎に包まれることになったともいえよう。ただし、建物の中軸線が明確になったことは朗報であり、これによって導かれる建物の所在や配置に対する推定案も、従来の想定からは格段に実際の状況に近づくことが期待できる。

一方、こうした河内国分寺に先行する遺構の存在が明らかになったことも重要である。それは、安山岩の自然石で縁取られた小さな長方形の基壇状遺構と、その周囲を広い範囲で取り巻いている瓦砂利敷である。これらの遺構については、その築造時期、共伴建物の有無、建物屋根を葺いた瓦の有無など不明な点ばかりであるが、その後に建てられた推定金堂の基壇築成土や周辺整地土から瓦や埴の破片が出土することから、瓦葺建物が存在した可能性は高いように思われる。また築造時期については、推定金堂所用瓦と大きな時期差を認めることは困難であることから、やはり8世紀中葉と考えておきたい。

次に、先行遺構の性格が問題になる。この問いに答えを見つけることは難しいが、先行遺構の様相が大和川対岸に位置して竹原井頓宮（離宮）と推定されている青谷遺跡の遺構と近似していることが参考になろう（註12）。青谷遺跡については、かつて国分寺式軒丸瓦・軒平瓦とされた瓦が現在は青谷式と称せられていることからも判るように、国分寺と同種の瓦がより早く、より主体的に使用されており、国分寺に僅かに先行して、8世紀中葉に瓦葺建物群として整備・利用された施設であると考えられている（註13）。この関係を今回の調査成果にも敷衍すれば、先行遺構は青谷遺跡の瓦葺建物群と一連の施設として築造されたと考えることができるかもしれない。

さて、こうした調査成果に基づいて想念を退しくすれば、奈良時代の大和と河内の国境付近において、大和川を挟んで北岸・南岸という広い地域に天皇の宿所と関連施設が営まれていたことが想像される。さらに、「国分寺建立の詔」が発せられると、施設の一部が寺地として提供され、慌しく堂塔の建設が進められた様子も思い描くことができる。しかし、こうした想念を現実のものとするためには、あるいは河内国分寺建立の歴史的実像に迫るには、より高い目的意識をもって、確認調査を継続していくことが必要であろう。さらに努力を積み重ねていきたいと考えている。

今回の調査にあたっては、土地所有者や地元区長をはじめとして多くの方々にお世話になりました。特に市民歴史クラブの皆様には、極寒の時期にも拘わらず、ボランティアとして毎日のように発掘調査に従事して頂きました。あらためて「多謝」の文字を記し、謝意を表します。

註

- 1 大阪府教育委員会『柏原市国分東条町河内国分寺跡発掘調査概要』 1970
- 2 柏原市教育委員会『柏原市所在遺跡発掘調査概報－太平寺遺跡・田辺遺跡・平尾山古墳群・北峯古墳群－』(柏原市文化財概報1990-Ⅲ) 1991
柏原市教育委員会『北峯古墳群・田辺遺跡 付船橋遺跡採集遺物』(柏原市文化財概報1998-Ⅴ)
1999
- 3 註1と同じ。
- 4 註1と同じ。
- 5 奥田 尚氏のご教示による。
- 6 滋賀県の穴太廃寺では創建寺院と再建寺院の遺構が検出されているが、再建の際に創建寺院基壇を完全に取り除かなかつたため、再建された時点で基壇基底部が地表面に露出していたと考えられている。
林 博通『穴太廃寺』『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1998
- 7 馬場 基「興福寺中金堂の調査－第325次」『奈良文化財研究所紀要2002』奈良文化財研究所 2002
奈良教育大学『新薬師寺旧境内大型基壇遺構』(奈良教育大学創立120周年記念新薬師寺 旧境内遺跡特別公開パンフレット) 2008
- 8 下野国分尼寺金堂では中央3間分の階段があったとされている。
栃木県教育委員会『下野国分尼寺跡』 1969
- 9 註5と同じ。
- 10 註5と同じ。
- 11 安村俊史「青谷遺跡出土瓦の再整理Ⅱ」「柏原市立歴史資料館館報 第19号－2006年度－』 2007
- 12 塚口義信「竹原井額宮と智識寺南行宮に関する二、三の考察」「古代史の研究 第4号」関西大学古代史研究会 1982
柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1984年度』(柏原市文化財概報1984-Ⅰ) 1985
- 13 安村俊史「竹原井額宮と青谷遺跡」「ヒストリア 第148号』大阪歴史学会 1995
古閑正浩「畿内における青谷式軒瓦の生産と供給」「考古学雑誌 第86巻第4号』日本考古学会 2001
- 14 野上丈助「報告4. 河内国府と国分寺址について」「古代を考える10 河内国府と国分寺址の検討」
古代を考える会 1977 挿図17

写 真 図 版

図版1 太平寺廃寺2008-1



1 調査地全景（南西から）



2 調査区南壁土層断面図

図版2 安堂遺跡2008-1

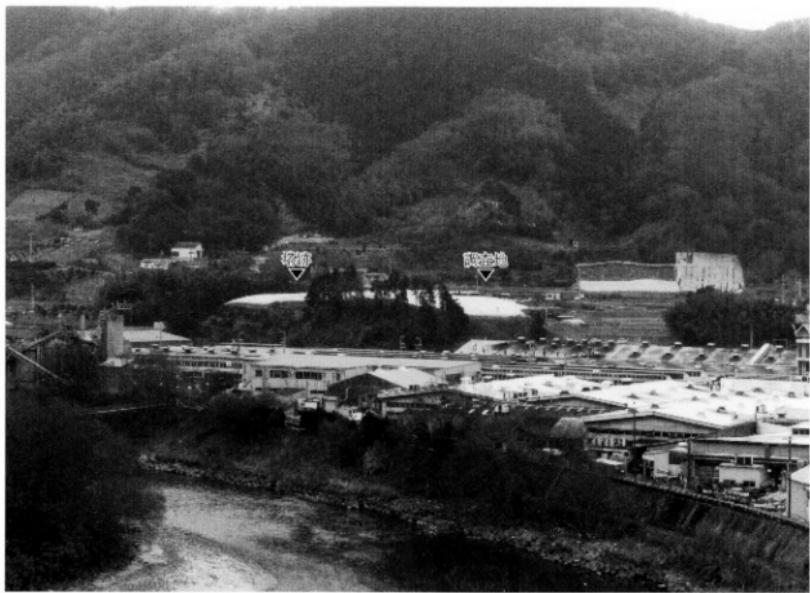


1 調査区全景（北から）



2 挖削状況（南東から）

図版3 河内国分寺跡2008-1



1 調査地遠望（北西から）



2 調査地遠望（南から）

図版4 河内国分寺跡2008-1



1 調査開始直後の状況
(西から)



2 旧トレンチ跡と延石屈折部
(東から)



3 延石屈折部から南・北・
西へ拡張 (西から)

図版5 河内国分寺跡2008-1



1 調査区中央部における瓦の出土状況（南から）



2 調査区西端部における瓦の出土状況（南から）

図版6 河内国分寺跡2008-1



1 W95ライン土層断面
(西から)

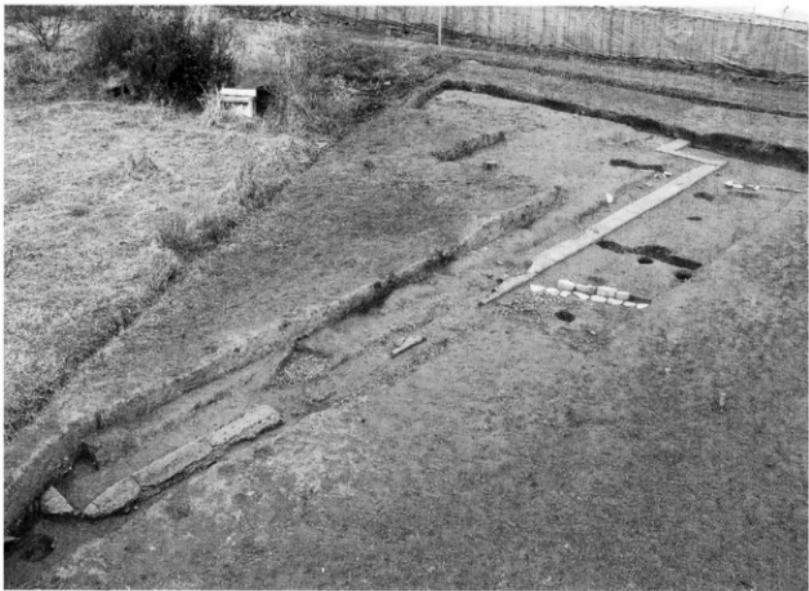
2 W100ライン土層断面
(東から)

3 W105ライン土層断面
(西から)

図版7 河内国分寺跡2008-1

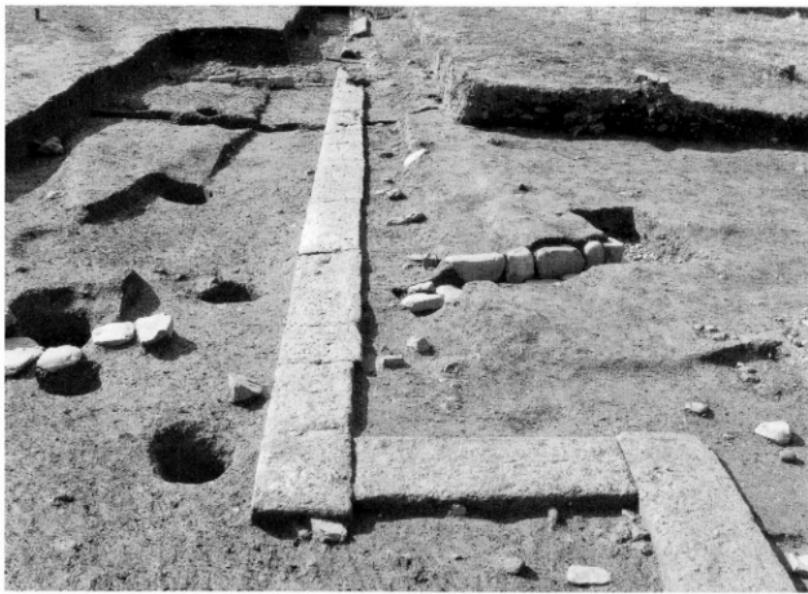


1 延石（推定金堂基壇と階段跡）と先行遺構（南東から）



2 延石（推定金堂基壇と階段跡）と先行遺構（南西から）

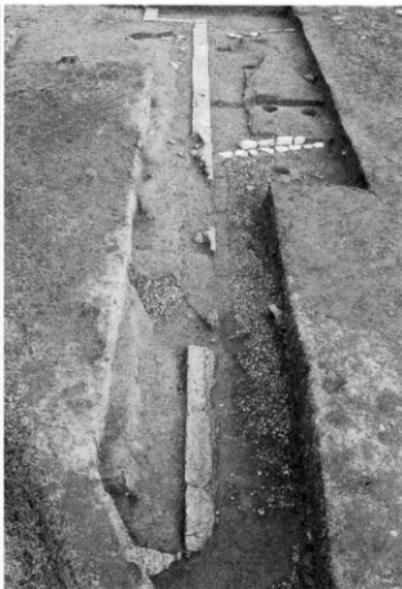
図版8 河内国分寺跡2008-1



1 延石と先行遣構（東から）



2 延石の東屈折部（東から）



3 延石の西屈折部（西から）

図版9 河内国分寺跡2008-1

1 延石20（南から）



2 延石17（南から）



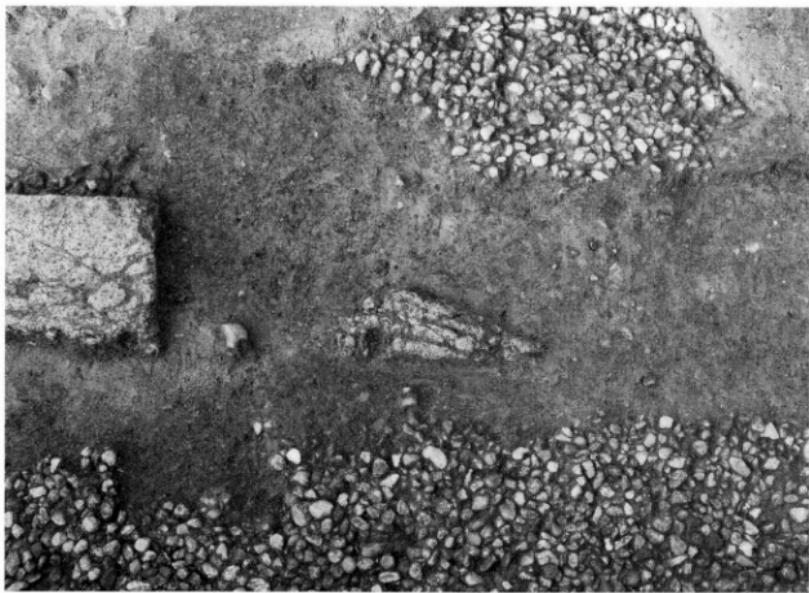
3 延石10（南から）
刻線と枘状突起



4 延石3（南から）



図版10 河内国分寺跡2008-1



1 延石の抜取り跡、旧トレンチ跡、先行遺構の小石敷（南から）



2 地覆石の出土状況（南から）

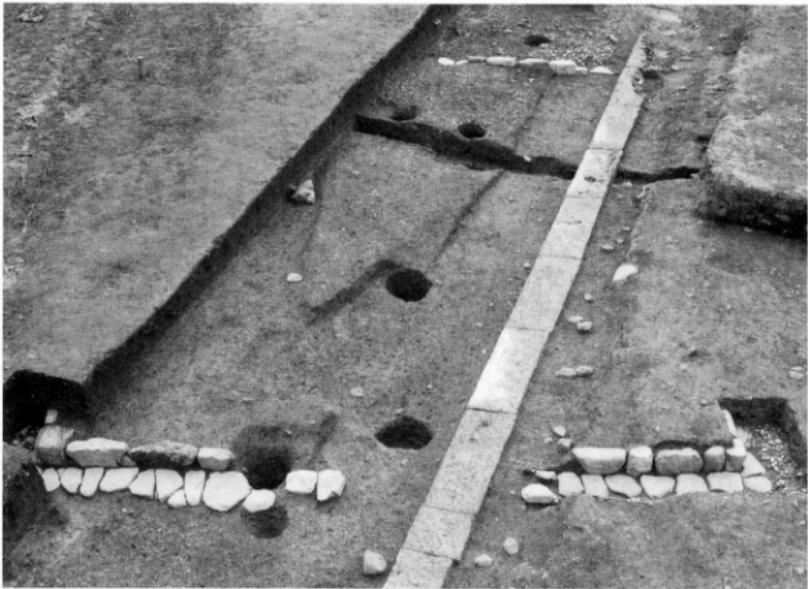


3 延石の西屈折部（南から）

図版11 河内国分寺跡2008-1



1 基壇状遺構（先行遺構）と延石（北から）



2 基壇状遺構（先行遺構）と延石（東から）

図版12 河内国分寺跡2008-1



1 基壇状遺構西側縁の石組み（西から）



2 基壇状遺構北東隅の石組みと周囲の小石敷（北東から）

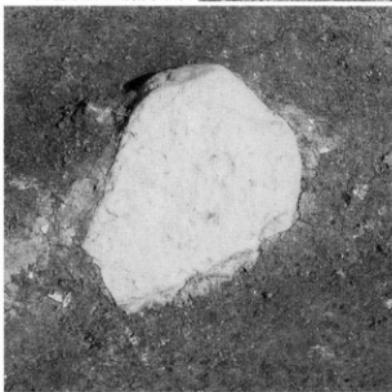
図版13 河内国分寺跡2008-1



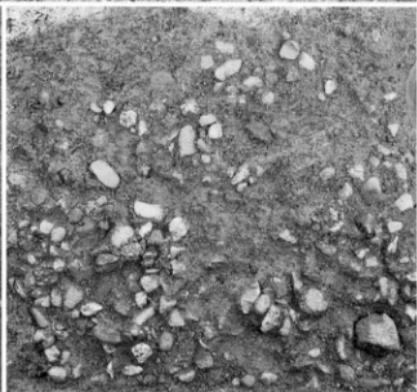
1 基壇築成土出土の瓦と
先行遺構の小石敷



2 W95ライン
基壇築成土断面状況



3 基壇築成土に混入された先行遺構石材



4 基壇状遺構上の小石敷

図版14 河内国分寺跡2008-1



1 市民歴史クラブ
ボランティアで参加



2 国分東小学校6年生
見学と発掘体験



3 現地説明会

図版15 河内国分寺跡2008-1



軒丸瓦 1



軒平瓦 2



丸瓦 25



丸瓦 23



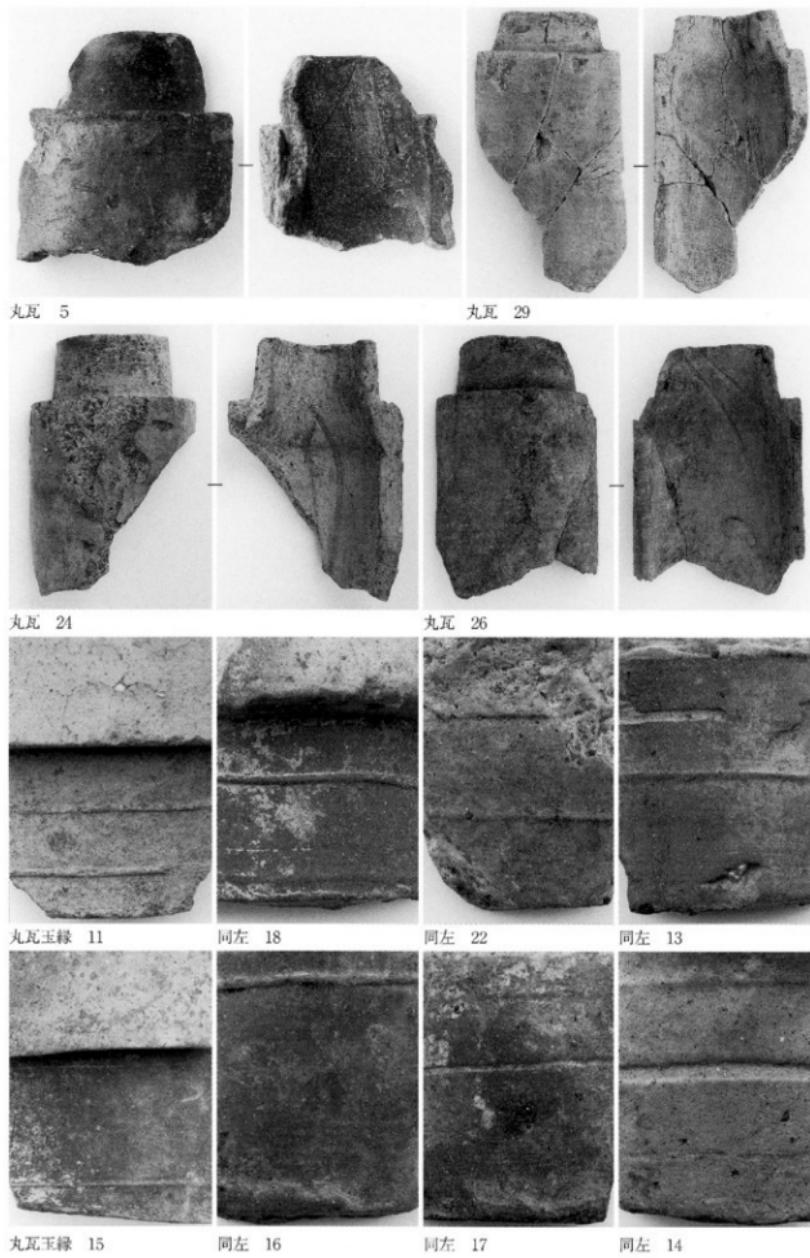
丸瓦 27



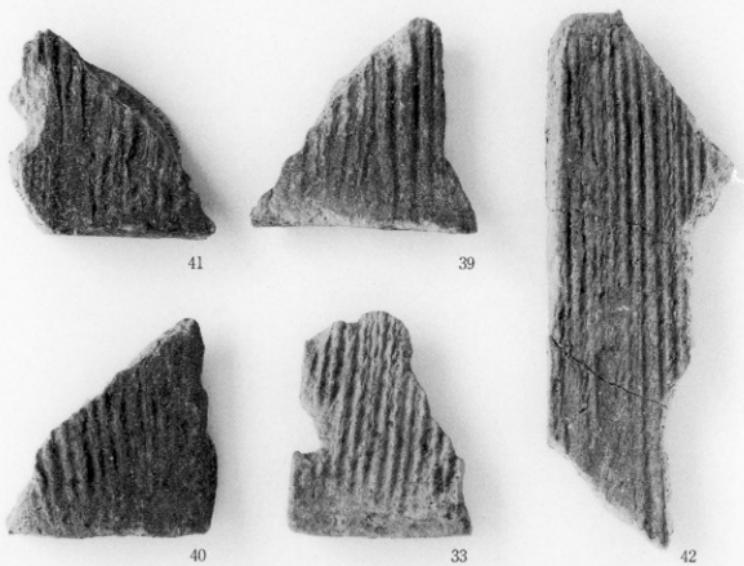
丸瓦 30



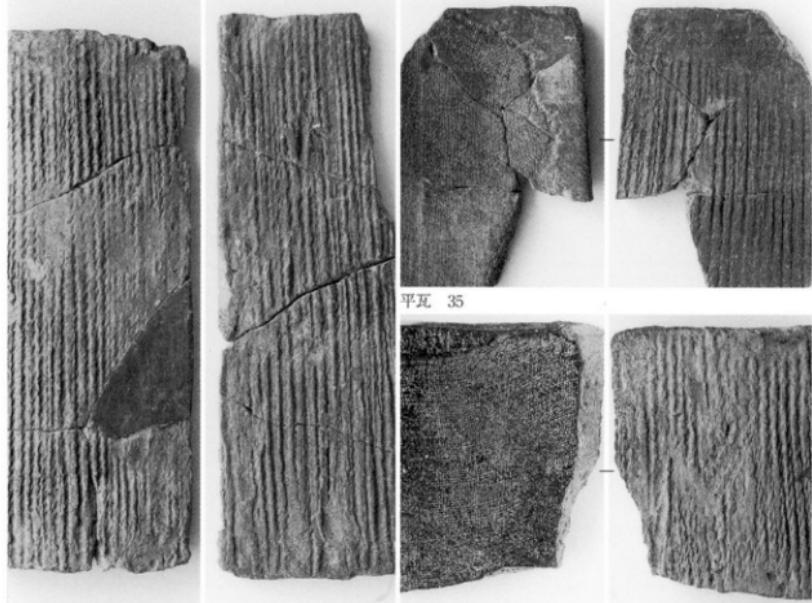
図版16 河内国分寺跡2008-1



図版17 河内国分寺跡2008-1



平瓦凸面



平瓦凸面 44

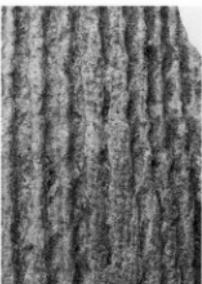
同左 43

平瓦 38

図版18 河内国分寺跡2008-1



平瓦凸面 52



同左 54



同左 48



平瓦侧面 46



平瓦 47



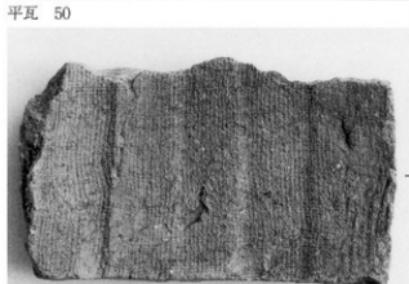
平瓦 49



平瓦 50



平瓦 45



平瓦 51



図版19 河内国分寺跡2008-1



平瓦 55



平瓦 59



平瓦 57



平瓦 63



地覆石 65



図版20 河内国分寺跡2008-1



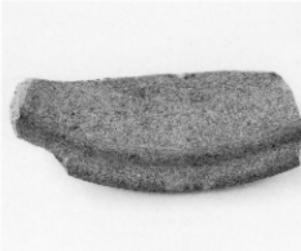
土師器 77



土師器 82



土師器 81



須恵器 83



土鍤 115



菱形鉄片 87



鉄鉤 88



鉄釘 90



同左 91



同左 92



同左 93

同左 110

報告書抄録

ふりがな	かしわらしないいせきぐんはくつちょうさがいはう
書名	柏原市内遺跡群発掘調査概報 平成20(2008)年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	2009-I
編著者名	桑野一幸・山根航
編集機関	柏原市教育委員会
所在地	〒582-8555大阪府柏原市安堂町1-43電話072-972-1501
発行年月日	平成21(2009)年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度(北緯) 経度(東経)	測定期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
太平寺魔寺	太平寺2丁目	27221	T G T 2008-1	34° 34' 58" 135° 37' 53"	H20.6.9 H20.6.9	4.00	個人住宅
安堂	安堂町	27221	AD 2008-1	34° 34' 52" 135° 37' 55"	H20.12.19 H21.3.12	120.00	宅地造成
高井田横穴群	高井田	27221	TDK 2008-1	34° 34' 18" 135° 38' 25"	H20.12.24 H20.12.24	225	個人住宅
	高井田	27221	TDK 2008-1	34° 34' 22" 135° 38' 19"	H21.3.11 H21.3.30	4.90	史跡整備
玉手山	円明町	27221	TY 2008-1	34° 33' 42" 135° 37' 34"	H20.12.15 H20.12.15	3.00	デジタル放送用 アンテナ
原山	旭ヶ丘3丁目	27221	HY 2008-1	34° 33' 29" 135° 38' 12"	H21.3.6 H21.3.6	2.00	校舎増築
田辺	田辺1丁目	27221	T B 2008-1	34° 33' 34" 135° 38' 30"	H20.6.26 H20.6.26	28.80	宅地造成
	田辺2丁目	27221	T B 2008-2	34° 33' 36" 135° 38' 28"	H20.12.19 H20.12.19	9.00	宅地造成
河内国分寺跡	国分東条町	27221	KBT 2008-1	34° 34' 00" 135° 39' 23"	H20.10.2 H21.2.16	89.00	範囲確認

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太平寺魔寺	社寺	なし	なし	なし	
安堂	集落	古墳、奈良	なし	土師器、須恵器、埴輪、平瓦	
高井田横穴群	横穴	なし	なし	なし	
	横穴	なし	なし	なし	
玉手山	集落	なし	なし	なし	
原山	集落	なし	なし	なし	
田辺	集落	なし	なし	なし	
	集落	なし	なし	なし	
河内国分寺跡	社寺	奈良、平安、中世	基壇延石、基壇状遺構	軒丸・平瓦、丸・平瓦 金堂基壇か	

柏原市内遺跡群発掘調査概報

平成20（2008）年度

発行：柏原市教育委員会

大阪府柏原市安堂町1-43

発行日：平成21年（2009）9月30日

印刷：株近畿印刷センター

